

庄川流域における大規模開発と 観光化による地域変化

研究史と開発史との関わりを中心に

Changes of Landscape in the Sho River Basin Caused by Large-scale
Development and Tourism : Analysis Centered on Relationships
between Research History and Development History

青木隆浩

AOKI Takahiro

- ①はじめに
- ②白川郷研究の芽生え
- ③五箇山研究の隆盛
- ④合掌造りの文化財化と観光化
- ⑤まとめ

【論文要旨】

本稿は、五箇山と白川郷に計3ヶ所の世界遺産登録地域を有する庄川流域を事例として、観光化の進展によって忘れられていった開発の歴史と研究史をあらためて見直し、かつての山村生活の様子を思い起こす試みをおこなったものである。現在の五箇山と白川郷においては、世界遺産に登録された相倉集落、菅沼集落、荻町集落の合掌造り民家ばかりが目立っているが、かつては庄川流域一帯で同様の民家に住み、焼畑や養蚕を中心とした生活を営んでいた。それが、1920年代からのダム開発とそれに伴う道路改良事業によって合掌造りの屋根を下ろす民家が急増し、その一方で生活水準の格差が拡大して、離村・廃村が相次いだ。また、研究上においても、1900年頃から合掌造り民家の起源に注目が集まっており、その後、ダム開発に対する住民の対応や生活様式の変化に関心が移っていった。

ダム開発は、庄川流域の集落を農業主体の生活から土木建設業や商業、サービス業中心の生活へと変えていき、さらに第二次世界大戦後から本格化した合掌造り民家の文化財保護や、1970年における相倉集落と菅沼集落の史跡指定は観光化を促進させた。そして、研究上の関心も合掌造り集落の景観保護や観光化の影響へと移行したため、かつての山村生活は忘れられていった。しかし、そのことは観光化以前の生活を経験してきた世代に違和感を抱かせる要因となっている。

【キーワード】 庄川、五箇山、白川郷、ダム開発、研究史

①……………はじめに

1. 研究のきっかけ

国立歴史民俗博物館の2013(平成25)年3月19日にオープンした新たな第4展示室(民俗展示)では、「『民俗』へのまなざし」、「おそれと祈り」、「くらしと技」という3つの大テーマを設定している。そのうち、最初の「『民俗』へのまなざし」は、『民俗』的なものが資源として発見され、再構成されていく様子を捉えた展示コーナーである。

その中には、「開発と景観」という中テーマがあるが、これは『民俗』が資源として発見、再構成される事例として、世界遺産や文化的景観に注目が集まる中、岩本編[2007, 2013]や山下編[2007]といった民俗学や文化人類学の立場から、景観の資源化に関する研究成果が着実に蓄積されてきた近年の動向を踏まえたものである。この中テーマ「開発と景観」では、そのタイトルの通り、ダム建設や道路建設、森林伐採、鉱山経営、企業城下町の建設、そして観光開発と景観や文化の変容について、それらの関係を考察することを共通課題とした。なお、ここで用いている「開発」という単語には、開発によって景観や文化が変わっていく受動的な意味と、景観や文化を保護するために開発をおこなう能動的な意味を併せ持たせている。その理由としては、景観や文化の保存を前面に打ち出している観光地が少なくない中、そのような観光振興によって新たな開発がおこなわれ、生活が変化していく実態を意識しているからである。

この「開発と景観」は、「アイヌ民族の伝統と現在」、「世界遺産と地域変容」、「近代化を支えた産業の現在」、「沖縄の自然と観光」という4つの小テーマから構成されている。おもな対象地域は、2007(平成19)年に「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」として文化庁の文化的景観に選定された北海道びらとり平取町と明治時代から観光開発が活発であった同じく北海道のしらおい白老町、1993(平成5)年に世界自然遺産として登録された青森県のにしめや西目屋村、あじがさわ鱒ヶ沢町、深浦町、秋田県藤里町にまたがる白神山地と鹿児島県の屋久島、1995(平成7)年に世界文化遺産として登録された富山県の五箇山と岐阜県の白川郷、近代化遺産として注目されている九州北部の旧炭鉱街と北九州市の八幡製鐵所、1972(昭和47)年に本土復帰を果たしてから自然イメージと裏腹に大規模な観光開発を進めてきた沖縄本島と西表島である。

本稿が研究対象とするのは、それら4つの小テーマのうち、富山県南砺市の通称・五箇山と岐阜県白川村、高山市しょうかわ庄川町に広がる白川郷である。それらの中で、五箇山のあいのくら相倉集落と菅沼集落、白川郷の荻町集落は、合掌造りの民家で広く知られており、1995(平成7)年には世界文化遺産に登録され、数多くの観光客を集めている。その後、世界文化遺産に登録された3集落に関する研究が急激に増えているが、本稿では研究対象地域をこれらに特化せず、むしろ上流の白川郷から下流の五箇山に至る庄川流域を広く扱う。なぜなら、世界文化遺産に登録された3集落は、周辺地域から独立して合掌造りを残してきたのではなく、庄川流域の広域的な開発との強い関わりによって現在に至っているからである。

五箇山と白川郷を等質的な文化圏として捉え、それらの集落を比較検討する視点は、すでに小山

[1933]などでみられるが、第二次世界大戦前まで盛んであった合掌造り民家の成立や分布、大家族制度に関する研究が下火になり、その後に個別集落の景観保全に関心が向かう中、あまり顧みられなくなっていった。だが、本稿ではそのような研究動向が、文化財としての合掌造り集落をかつての開発や生活変化から切り離す原因になっていると考えている。

具体的にいうと、その開発対象とは電源開発を目的としたダム建設とそれに伴う道路建設であり、下流の^{そやま}祖山ダムから上流の^{みぼろ}御母衣ダムまでをおもな範囲とする。実際にも、合掌造りの集落はもともと祖山ダムのある南砺市の旧^{たいら}平村から御母衣ダムの建設によって多くの民家が水没した高山市の旧莊川村に至る庄川沿いに広く分布していた。また、ダム建設に伴って整備された道路とは、庄川沿いに通っている現在の国道156号線のことである。

2. 問題意識

筆者が2008（平成20）年に初めて五箇山観光協会を訪れた時、その職員から「世界遺産に登録されたのはありがたいし、名誉なことだけれど、それによってかつての山村生活が忘れられてしまったような気がする」という話を聞いた。この話は、筆者が国立歴史民俗博物館第4展示室の中テーマ「開発と景観」で五箇山・白川郷の展示をしたことと本稿を執筆することの基本方針を定める大きなきっかけとなっている。

五箇山観光協会の職員が「かつての山村生活が忘れられてしまった」と考える根拠は、もともと合掌造りの民家が庄川流域一帯に分布していたにも関わらず、世界遺産登録後は登録地域の相倉集落と菅沼集落ばかりが注目されるようになったことと、観光客が合掌造り集落にしか関心を持たなくなってしまったことにある。そこで、五箇山観光協会では、1960年代まで合掌造りの大きな民家が数多く残っていたために史跡指定の候補地となっていた^{かごと}籠渡集落の新旧の写真を観光客に見せて、かつてはこの辺りの民家の多くが合掌造りであったことを観光客に伝えているという（写真1）。また、五箇山には^{しもなし}下梨集落の麦屋節や^{かみなし}上梨集落のこきりこ唄といった民謡の他、五箇山和紙、五箇山豆腐、浄土真宗の行事である^{ほんご}報恩講さまで振る舞われる^{かみなし}報恩講料理、^{かみなし}上梨集落の地酒、温泉など数多くの観光資源がある。ところが、相倉集落と菅沼集落が世界文化遺産に登録されてからは、合掌造り集落ばかりが観光資源として注目されるようになった。そして、民謡や和紙、豆腐、報恩講



1931(昭和6)年撮影 所蔵：南砺市立平図書館



2011(平成23)年11月撮影

写真1 籠渡集落の景観変化

料理といった合掌造り以外の観光資源は、観光用のポスターやパンフレットでの露出を大幅に減らされていったのである。

なお、世界遺産登録や文化財指定が、地域の豊かな歴史を簡略化して説明し、現実から乖離した表象をつくりあげるとともに、地域的な経済格差を拡大させ、地元住民に違和感を与えることは、他地域でもしばしばみられる。なぜなら、世界遺産の登録や文化財の指定に際しては、それらの対象を定め、登録や指定を求める根拠をわかりやすく簡潔に説明する必要があるからである。それらの過程で、世界遺産登録や文化財指定の物語から漏れてしまった地域や歴史は、観光資源としてあまり注目されなくなってしまう。このような制度として回避することが困難な過程は、地域の歴史表象や経済に対して負の影響をもたらしかねない。

そこで、本稿ではあえて世界遺産登録や文化財指定から漏れた地域や歴史に目を向け、五箇山と白川郷における山村生活の記憶を取り戻す作業をしていきたい。なぜなら、そのような作業が、各地の小さな物語を呼び起こし、観光の枠を超えた地域の復権につながっていくと考えているからである。

なお、本稿で対象とする五箇山は、富山県庄川流域のおたん とがたん しもなしたん かみなしたん小谷、利賀谷、下梨谷、上梨谷、あかおたん赤尾谷という5つの谷の総称であり、行政区画としては富山県南砺市のたいら旧平村、かみたいら旧上平村、旧利賀村（以下、利賀村と略）を範囲とする。また、白川郷は、かつて上白川郷と呼ばれた岐阜県高山市のしょうかわ旧莊川村（以下、莊川村と略）と下白川郷と呼ばれた岐阜県大野郡白川村の総称である。これら5つの旧村を本稿では庄川流域の五箇山・白川郷として、一括りの研究対象地域とする。ただし、その中でも研究成果の蓄積が豊富で、かつ社

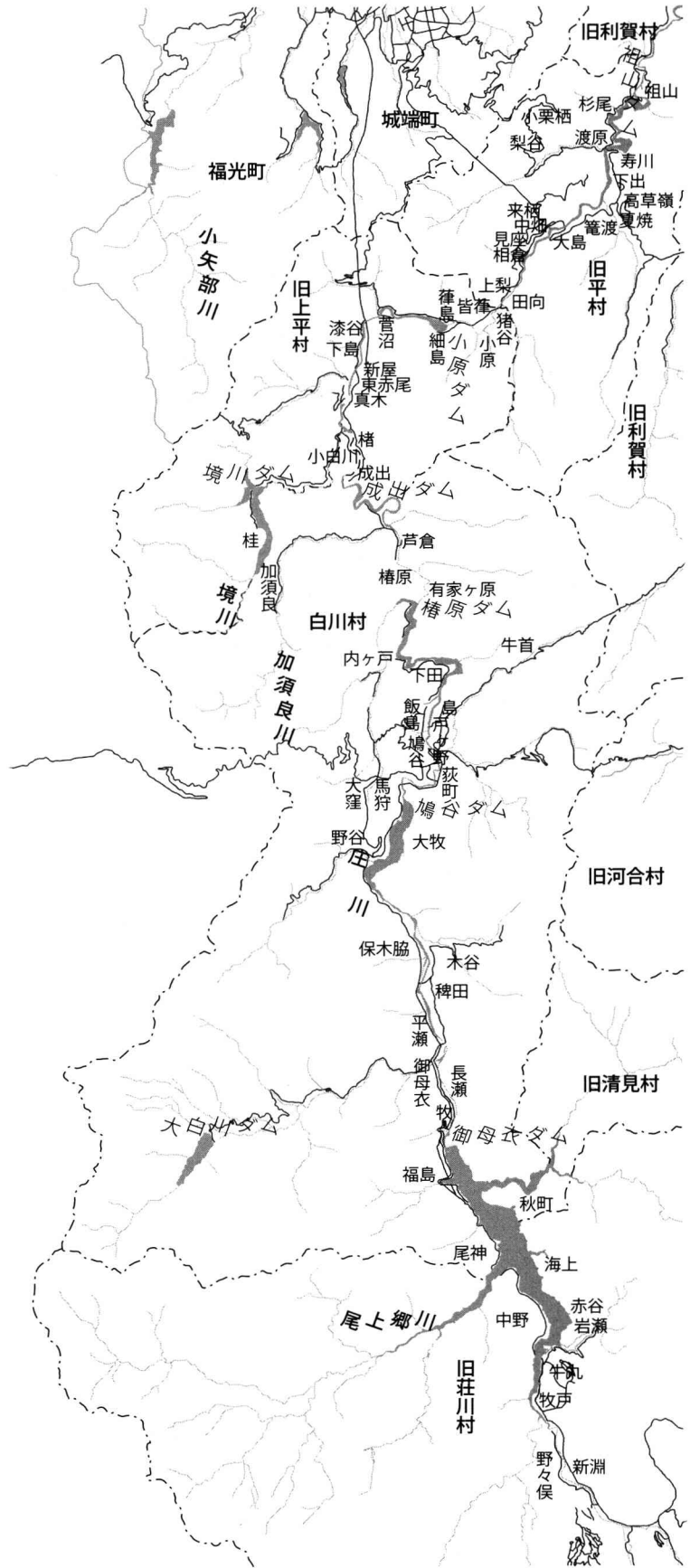


図1 庄川流域の略図
原図は国土地理院発行5万分の1数値地図「下梨」,「白川村」,「白山」

会的な関心の強い旧平村（以下、平村と略）と旧上平村（以下、上平村と略）、白川村に重点を置いて考察を進めていきたい(図1)。

3. 研究方法

現在は合掌造り集落で注目されている五箇山と白川郷であるが、学問的には明治時代から風俗や民族性、大家族制、合掌造り民家の源流などについて、民俗学や人類学、考古学、建築史学、経済史学、社会学といった幅広い分野から関心を集めてきた。当初、注目されていたのは、古い文化が残存していると考えられていた庄川流域上流の白川村御母衣集落や長瀬集落、平瀬集落、木谷集落、保木脇集落である。ところが、1925（大正14）年に着工され、1930（昭和5）年に竣工した利賀村の小牧ダムと1927（昭和2）年に着工され、1930（昭和5）年に竣工した平村の祖山ダムにより、学問上の関心は「庄川問題」と言われるダム建設反対運動とダム建設による五箇山の被害や生活変化に移っていった。

第二次世界大戦後になると、すでに崩壊していた大家族制の社会経済的要因や、ダム開発によって急速にその数を減らしていた合掌造り民家の保護に学問上の関心が移行した。また、1970年前後にはダム開発による廃村が相次いだため、その様子を記録し、全国に広く伝えることを目的として、多くのマスコミ関係者や写真家、研究者、学生が五箇山と白川郷に流入した。

さらに、1970（昭和45）年に五箇山の相倉集落と菅沼集落が史跡指定されると、合掌造り集落の景観保全と観光化という新たなテーマが創出される。その後、1976（昭和51）年に白川村荻町集落が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことにより、景観保全を目的とした建築学や造園学からの関心が集まった。そして、1995（平成7）年に相倉集落と菅沼集落、荻町集落が合掌造り集落として世界文化遺産に登録されると、建築学や造園学の他、民俗学や地理学、経済学などが関心を寄せるようになった。

ただし、ここで注意すべき点は、五箇山と白川郷の社会経済的な状況があまりにも急激に変化したため、研究上の関心がそれに応じて何度も移ってしまったことである。これによって、五箇山と白川郷の研究は、1つの問題関心について論争を続けている間に、主要なテーマを次々と移行させてしまい、まとまった地域史を構築しづらい状況にあった。そのことが、研究活動が盛んであったにも関わらず、五箇山と白川郷の歴史を簡略化させてしまった大きな要因だと思われる。

なお、白川村の研究史を整理した既存の成果としては、黒田・小野〔2003〕や黒田〔2003, 2007〕、才津〔2008〕などがある。黒田・小野〔2003〕は、合掌造りの民家研究史から個別民家の文化財指定、さらには集落単位の景観保全へと至る白川村研究の経緯を簡潔に追っている。黒田〔2003〕はこれとやや重複する部分もあるが、白川村に対する研究者や旅行者のまなざし、観光資源の記号化といった要素を加えて、さらに詳しく研究史をまとめている。黒田〔2007〕は、これらに大家族制度や加須良集落の集団離村、御母衣ダム建設の影響などを加え、白川村の研究史を幅広く紹介しつつ、景観保全のあり方について論じたものである。一方、才津〔2008〕は、白川郷が世界遺産に登録されるに至る、注目された過去としての大家族制研究に焦点をあてている。

これらの既存研究に対し、本研究は五箇山を合わせた庄川流域の研究史を広く対象とする点に特徴を有する。研究対象をこのように広く設定した理由は、庄川流域の歴史がダム開発とそれに伴う

生活や景観の変化、人口の激しい流入の歴史であり、その中で五箇山と白川郷がともに連続性をもって変化してきたからである。とくに、ダム開発による景観変化という点では、五箇山が白川郷に先行して進んできたのであり、したがって五箇山の研究史を見直すことは、白川郷の歴史をより広い視点から捉えるうえで有用であると考えている。

また、これまでの白川村の研究史が世界遺産登録に至る経緯や集落の景観保全に着目してきたのに対し、本研究は研究者による問題関心の変化や、ダム開発、道路建設、文化財指定、世界遺産登録による景観と生活の変化、さらにはそれらによって忘れられていった山村生活の記憶に重点を置く。研究上の問題関心や行政の重点領域に変化が生じれば、それまでの問題意識は希薄化する。中でも、世界遺産登録は申請するにあたって文化財としての価値をわかりやすく説明する必要性に迫られることから、歴史の物語を単純化する傾向にある。ここに地元住民自身が抱いている記憶と他者に向かって発信される地域表象のイメージにズレを生じさせてしまう原因がある。

そこで、本稿では五箇山と白川郷に関する既存研究をあらためて分野横断的に広く見直すとともに、それらの成果を客観的データによって再確認する作業をしていく。そのような過程を通じて、かつての山村生活のうち何が忘れられていったのか、さらには地域認識がどのように変わっていったのか明らかにしていきたい。

②……………白川郷研究の芽生え

1. 白川村の大家族制度と合掌造り民家に関する研究のはじまり

庄川流域の合掌造り集落に関する既存研究の中で、白川郷は五箇山よりも早いうちから注目された。とくに藤森 [1888] は、白川郷に関する最初の学術論文として、その後の既存研究でしばしば紹介されてきた。ただし、その内容は住民の容姿、家族構成、おもな産業、宗教、家の間取りなど多岐にわたる反面、羅列的な記述にとどまる。むしろ、その後の白川郷研究に多大な影響を与えたのは、高木 [1899] であろう。彼は、「白川の郷、風俗頗るプリミテブにして大古の遺風髣髴として想見すべく、特に家族制度の奇なる、他に類例少し」という坪井正五郎の言葉を聞いて、白川郷研究を始めたという [高木, 1899, 3頁]。そして、平家の落人の血縁であるという説や、徳川時代に追放人が来た場所であること、最初の土着民が樵夫であることを紹介したうえで [同, 20頁]、家長権が強大であることや相続者以外の者が結婚する権利をもたず、分家独立を許されないことなど、後の白川郷研究に大きな問題提起を投げかける大家族制の特徴を示した [同, 21頁]。

このような白川村の大家族制に古代からの連続性をみようとしたのが岡村 [1914] である。岡村 [1914, 1頁] は、「遙に古代に於て我朝一般に行はれたる家族制は殆と現時白川村中切のものと同なりしこと疑なきなり」として、702 (大寶2) 年の国造族と1905 (明治38) 年の白川村遠山家、大塚家の戸籍を比較した。さらに、白川村平瀬集落から古墳時代の遺物が発見されていることをもって大家族制度が古代の遺制であることの根拠とし [同, 10頁]、高木 [1889] が紹介した平家落人説や徳川時代追放人来往説、樵夫土着民説を否定した。こうして白川村の大家族制度は、古代ロマンを想起させる研究対象になっていった。

なお、岡村の引用文に出てきた「白川村中切^{なかぎり}」とは、白川村の南部、庄川の上流に位置する尾神^{おがみ}、福島、牧、御母衣^{みぼろ}、長瀬、平瀬、木谷の7集落を指している。この中切地方は、大家族が多いことから、その成立と解体の過程を調査しようと数多くの研究者が訪れた地域である。とくに御母衣の遠山家は、かつて世帯人員が一時期40人を超える代表的な大家族であったため、調査協力の依頼が数多く舞い込んでいたという。一方、現在は世界遺産に登録され、数多くの観光客を集めている荻町集落は、1戸当たりの世帯人員数があまり多くなかったため、当時注目されていた大家族制度の研究においては、中切地方との比較対象にとどまっていた。

実際にも、村別の1世帯当たり人口を確認すると、白川村の人数が他の周辺村よりも2、3人ほど大きいことが確認できるが、大家族といえるほどの規模ではない(表1)。反対に、中切地方の1戸当たり世帯員数は、集落によってバラツキがあるものの、おおそ1900年代初期まで飛び抜けて多かった(表2)。ただし、家族問題研究会編[1988, 24頁]で小山隆が述べているように、「白川の大家族が、徳川時代に於いても白川区内一般の制度ではなく、況んや飛騨一円の旧慣で無く、今日専ら注目されているのと同じく、白川区内の平瀬、御母衣、長瀬等の諸部落を中心とする謂わゆる中切地方の特殊現象で」あった。さらに、中切地方の戸数が少なかったため、その値が白川村全体の1世帯当たり人口を大きく引き上げることはなかった。このように、白川村を広く見渡すと大家族制度は統計データの平均値によって打ち消されてしまうほどごく一部の集落にみられたことである。

この一部の集落で特殊にみられたことでありながら、古代ロマンを髣髴とさせていた当時の白川村研究に対して、大家族制度のより現実的な成立要因を求めることで批判をしたのが本庄[1911]

表1 五箇山と白川郷における戦前の町村別に見た世帯数と人口の推移

	平村			上平村			利賀村			荘川村			白川村		
	世帯数	人口	1世帯当の人口	世帯数	人口	1世帯当の人口	世帯数	人口	1世帯当の人口	世帯数	人口	1世帯当の人口	世帯数	人口	1世帯当の人口
1920	622	3,665	5.9	283	1,705	6.0	510	2,080	4.1	494	2,988	6.0	386	2,715	7.0
25	631	3,818	6.1	294	1,802	6.1	528	3,101	5.9	523	3,057	5.8	432	3,733	8.6
30	654	5,091	7.8	296	1,804	6.1	484	3,204	6.6	523	3,490	6.7	449	2,909	6.5
35	694	4,052	5.8	309	1,818	5.9	486	3,055	6.3	576	3,472	6.0	482	3,590	7.4
40	639	3,844	6.0	324	3,141	9.7	478	3,391	7.1	635	3,729	5.9	495	2,873	5.8
50	705	3,996	5.7	376	2,502	6.7	523	3,562	6.8	717	3,926	5.5	635	3,824	6.0
55	664	3,714	5.6	330	1,908	5.8	476	3,246	6.8	682	3,558	5.2	931	6,688	7.2
60	652	3,269	5.0	300	1,729	5.8	452	3,038	6.7	631	3,560	5.6	1,588	9,436	5.9
65	631	3,094	4.9	295	1,428	4.8	425	2,568	6.0	508	2,376	4.7	768	3,211	4.2
70	573	2,401	4.2	269	1,142	4.2	374	1,961	5.2	534	2,316	4.3	672	2,525	3.8
75	534	2,110	4.0	257	1,100	4.3	323	1,529	4.7	495	1,905	3.8	644	2,265	3.5
80	517	1,829	3.5	258	1,103	4.3	297	1,328	4.5	445	1,694	3.8	577	2,132	3.7
85	494	1,770	3.6	273	1,070	3.9	440	1,310	3.0	433	1,562	3.6	563	2,001	3.6
90	489	1,727	3.5	435	1,068	2.5	399	1,137	2.8	435	1,450	3.3	628	1,892	3.0
95	487	1,620	3.3	357	1,016	2.8	440	1,161	2.6	451	1,390	3.1	661	1,893	2.9
2000	463	1,416	3.1	329	997	3.0	429	1,083	2.5	430	1,345	3.1	614	2,151	3.5

資料：国勢調査報告

単位：世帯数は戸、人口は人。

注：1985年以前の世帯数は普通世帯、1985年以降の世帯数は一般世帯の値。

である。彼は、白川村民の主業を農業、副業を養蚕であると述べたうえで、主業の僅少な田畑と山林を分割するわけにはいかず、かつ「分家即家族人員ノ減少ハ、畜ニソノ主業ノミナラス副業ヲモ破滅セシムル」との理由から、分家を禁止したことが大家族制度のおこなわれた要因とみている

表2 白川村中切地方の世帯数と1戸当平均世帯員数

		1886年	1899年	1918年	1930年	1955年
牧	戸数	-	2	-	6	25
	世帯員数	-	21.0	-	4.7	8.2
御母衣	戸数	4	4	5	5	7
	世帯員数	22.3	23.0	20.0	12.4	7.1
長瀬	戸数	13	16	14	18	12
	世帯員数	16	17.9	15.9	8.8	5.8
木谷	戸数	7	7	-	7	10
	世帯員数	19.0	26.0	-	12.8	7.3
平瀬	戸数	7	7	17	53	135
	世帯員数	18.5	23.1	7.6	5.2	7.2

資料：大野郡白川村史編集委員会編『白川村史』、大野郡白川村、1968
注：「世帯員数」は1戸当たり平均世帯員数の略。

[同、138頁]。さらに、このような経済的要因のみならず、専制的な家長権や村民の独立心の欠乏が、分家を禁止する原因だとも指摘している [同、138頁]。

こうした本庄 [1911] の説に対し、福田 [1925] は戸籍上よりも実際に住んでいる世帯員数が少ないことを指摘し [同、182頁]、むしろ白川村における家族の特徴として戸主以外に妻がなく、多くの女性が私生児を抱えたまま大家族の中にとどまることを重視している [同、185頁]。その理由としては、戸主による労働の略奪があり [同、188頁]、そのために女性の出嫁と男性の分家が認められていないのだという [同、192頁]。この研究は、マルクス主義の理論を援用しながら、白川村の大家族制度を原始的生活と位置づけつつ労働の略奪がおこなわれていることに着目した最初の試みであり、1930年代のマルクス主義に基づいた白川村研究の隆盛に結びついていった。

実際にも1920(大正9)年における村別の配偶関係をみると、白川村における有配偶者の割合は、五箇山や荘川村の各村よりも男女ともに低い(表3)。だが、これについても本庄 [1938、135頁] が、「家長と家族の関係は伝統と習俗とが支配せるだけで、権力意志が専制的に支配してゐるわけではない」と反論している。1920(大正9)年の『国勢調査報告』によると、白川村は自村出身者の割合が88.2%であり、荘川村の86.5%を上回っているものの、平村の96.6%や上平村の94.0%、利賀

表3 1920(大正9)年における五箇山・荘白川の村別配偶関係

	未婚				有配偶				死別				離別			
	男		女		男		女		男		女		男		女	
	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)	実数(人)	割合(%)
平村	983	56.0	952	49.8	692	39.4	757	39.6	73	4.2	191	10.0	7	0.4	10	0.5
上平村	495	57.2	426	50.8	309	35.7	335	39.9	52	6.0	72	8.6	10	1.2	6	0.7
利賀村	824	56.9	737	48.0	541	37.4	634	41.3	69	4.8	147	9.6	13	0.9	16	1.0
荘川村	941	59.1	739	52.9	589	37.0	540	38.7	46	2.9	103	7.4	16	1.0	14	1.0
白川村	917	60.8	657	54.4	524	34.8	421	34.9	54	3.6	118	9.8	12	0.8	12	1.0

資料：国勢調査報告

村の93.2%よりもだいぶ低い値であることが確認できる。自村出身者の割合は、人口の流動性を示す指標であると考えられることから、白川村の住民は五箇山と較べて戸主の専制的支配による労働の略奪を強く受けていたとは言い難く、むしろ表2で示した中切地方の1戸当たり世帯員数の経年変化が大きいことから、経済状況によって比較的柔軟に対応していたと考えられる。

一方、合掌造りの民家に焦点をあてた初期の研究としては、竹内[1923]が重要である。この論文は、まだ合掌造りという言葉を用いていないが、その60度内外の傾斜をもった茅葺屋根の詳細なスケッチと間取りの平面図を掲載した建築史学の研究としては、管見の限りこれが最初である。茅葺の屋根が一般的であった当時において、合掌造り民家は屋根の勾配が急であることと、二階以上の高層であることが特徴的であった。このような民家が建てられた理由として、彼は「大家族が一軒の家に住む目的から面積を広くとる事は、斯うした山間の荒蕪地では僅かな耕地でも犠牲をする事を許されないから、従つて二階三階と上にのびたのであるといふ説」と、「養蚕を目的として二階三階をとる様になつたといふ」説を紹介している[同、9-10頁]。そして、家屋の形態が竪穴式住居と同じ壁のない切妻であるため、古代からの残存か否かで議論の白熱した保木脇集落の天地根元造り、いわゆる「山小屋式の家」(マタダテ)⁽¹⁾について(写真2)、この様式こそがこの地域本来のものであり、平家落人説を裏書するものと示唆している[同、10-11頁]。マタダテは後に火災などの非常時に造られた仮住まいであったことなどが明らかにされるが、それまでは竹内の論文をきっかけに白川村の大家族と合掌造りの関係が重要な論点になっていった。

なお、ここで竹内が平家落人説を支持していたことは、ブルーノ・タウトの著作に大きな影響を与えている。竹内がタウトを白川郷に案内していたことは広く知られている事実であるが、タウト[1939、21頁]は、「十三世紀に源氏に滅ぼされた平家の残党は、飛騨白川の山奥に逃れた。ここに幾軒かの農家があり、もちろん現在にいたるまでには何遍か造り替えられはしただろうが、しかし昔ながらの構造をしている」と述べ、合掌造り民家の起源を竹内と同じく平家の落人に求めている。タウトは、日本の芸術に対するヨーロッパ人の判断が、日本人のそれに大きな影響を与えることを自覚していたが[同、10頁]、彼の情報源もまた現地を案内した日本人研究者であったことは、至極納得できるとはいえ、皮肉なことである。それでも、このタウトの著作は合掌造り民家の伝統と現在を結びつけることで日本美の再発見を促す契機となり、地元の郷土史家に古代や中世を起源と



昭和20年代以前の保木脇集落
白川村教育委員会所蔵



現在に残る相倉集落のマタダテ
2011(平成23)年10月撮影

写真2 白川村保木脇集落の風景と現在に残るマタダテ

する歴史ロマンを抱かせる要因となった。

これに対し、有賀 [1936, 6頁] は、「白川の豪壮な民家が他に比類ないものであるとしたならそれは古い貴族の伝統を継ぐ故ではなくて、田舎の粗野な建築家が彼等の生活の要求に添ふために一切の装飾を排して構造の原理を力強く組織したからに外ならない」として、合掌造り民家の起源を平家の落人に求めるタウトの説を批判した。だが、有賀が批判すべきは、タウトに情報提供をした竹内であり、ごく一部の人脈を通じて調査した外国人の研究成果をあえて受容し、自らの都合に合わせて利用した日本人の研究者やマスコミの方である。残念ながら、そのような批判は少なく、実際には平家落人説の他、先住民族の遺制、アイヌの系統、上代の大和民族の名残、奈良朝時代の遺風、楠氏の末裔といった様々な起源論が提唱され、権威づけされては消えていった⁽²⁾。

ただし、そのような歴史ロマンは、白川村に多くの研究者を惹きつけ、地元住民に大きな影響を与えていった。瀬川 [1935, 71頁] は、白川村の住民が小説家や高等師範の教員などによる現地調査について様々な情報交換をしている様子を描いている点で興味深い。中でも重要なのは「私の家は大家族だといつて立派な方々が沢山見に来られます。私もよく勉強して祖先にまけない、立派な人間になり度いと思ひます」という大家族の男子児童によって書かれた作文が白川小学校の郷土読本に掲載されていたことである。つまり、大家族制や合掌造り民家によって一躍有名になった白川村に数多くの研究者が押し寄せてきたことは、地元住民の郷土愛や自尊心を高める効果につながった。そして、白川村には、研究者に郷土の歴史を語る、平瀬集落の坂本善兵衛のような「古老」という名の顔役が数人出現し、郷土史の構築に大きな役割を果たすことになる。

2. 郷土史としての白川研究の発展

1930年代に入ると、全国的な潮流によって郷土史研究が盛んになる。白川村についても、例えば野村 [1931, 7頁] が、郷土史研究の立場からあらためて大家族が元禄以前から連続と続いていると主張している。さらに岐阜県高山町（現・高山市）を拠点として、江馬修と江馬三枝子を中心^{なかし}に活動した飛騨考古土俗学会は、雑誌『ひだびと』で白川村に関する数多くの論文を発表した。そして、そこでの論点は、江馬修 [1934, 12頁] の「大家族部落の在る所、そこには必ず石器時代の遺跡が残つてゐた」ことを根拠にして、「白川村の大家族制も、（中略）その制度と土俗の先史的原始性から見て、その起源はやはり遠い々々太古に遡るものに違ひないとひそかに考へてゐた」という見解を示したことを起点にし、古代と大家族制度、もしくは合掌造りの歴史的連続性を検討することであった。

その中心を担ったのは、江馬修の妻であった江馬三枝子である。江馬 [1996] は雑誌『ひだびと』に数多く投稿した論文の集大成ともいえる著作物であり、豊富な現地調査の結果を客観的に伝えることで、様々な議論の有力な素材となっている。例えば、大家族制の成立要因と考えられていた家長権について、「私は家長権の専制的な強大といふやうな痕跡でも見出さうと努めてみたが、少くも木谷を中心としてのあの附近の大家族内では、さう云ふ事実は認められなかった」と否定し [江馬, 1937, 9頁]、古代からの遺風とみなされてきたマタダテについても、「以前は永久的住居としても使用されてゐて、明治時代には保木脇に1戸（森下浅右衛門）大牧に2, 3戸あつた。保木脇のは原始的な天地根元造の典型として、よく問題になつた家であるが、火災後経済上の都合で、マタダテ

で一代住んでゐたものである」と異議を唱えている〔江馬, 1938, 11-12頁〕。

ただし、これらの異議は、白川村の大家族制や合掌造りにおける古代からの歴史的連続性を否定するものではない。むしろ、江馬三枝子〔1996, 169頁〕は、白川村の大家族制について「半ばは実際の資料によって、半ばは予感として古代説を支持している」と述べている。彼女とその同人たちが議論していたのは、古代からの連続性を示すものとして、大家族のどのような遺制を、あるいは合掌造りの様々な建築様式のうちどれを取り上げるかということであり、それらが近世から近代を経て変化してきた要因を明らかにすることであった。

例えば、『ひだびと』の同人である三浦薫雄〔1937, 49-50頁〕は、「切妻式民家は、少くとも白川村地方の大家族が、その祖先から伝来し、継承し来つた住居建築方式であつたことだけは断言してもいい」と述べ、切妻式民家、すなわち合掌造りの民家と大家族制を一体としてみた上で切妻式屋根の違いとその分布を「竪穴住居から合掌掘立小屋、天地根元式、白川式、甲府盆地式、大和川式に及ぶ」という変化の段階に求めていた〔同, 46頁〕。一方、富田令禾〔1937, 53頁〕は、合掌造りの民家と大家族制をいったん切り離し、「文化は平野から山地へ浸潤してゆくのが原則であるから河流に沿ふて遡るほど原始的に近くなる」とした上で、そこから白川式切妻を上流の荘川式寄棟からの変化と推理した。反対に、赤木清〔1936, 3頁〕は、「常識的に考へてみても、今日あるやうな壮大な大家屋が上代から存在したらうなぞとはまるで考へてゐない。しかし、大家屋の発生以前にも、大家族そのものは存在したに違ひない」として、大家族と大家屋の関係をいったん切り離し、大家族制を古代から連続した遺制としてみる説を主張している。ただし、合掌造り民家や大家族制の起源を明らかにしたいという問題関心は共通しており、その意味で彼らは同人だったのである。

また、このような郷土史研究の成果は、遺伝学や体質人類学の関心を誘い、それが郷土史家側の自信ととまどいにつながっていた。加藤〔1937, 2頁〕は、「古き民族はそのまゝ現代の民族に非ざれども、白川の如き民族移動の少なき地方は、古き民族形質が僅々数千年の間に容易にその形質を変ずるとも思はれない」と述べて生体測定をおこない、白川人を北陸人とともに先史時代人類の体質を最も顕著に保有すると結論づけている〔同, 10頁〕さらに、鈴木・今村〔1937, 209頁〕は、五箇山の利賀村を事例とした研究ではあるが、「同部落ハ飛越国境ニ近ク周囲ハ全ク山岳ニ囲コマレ極最近ニ至ル迄交通甚ダ不便ノ土地デアツタカラ古来ヨリ近親結婚ニヨル大家族制度ガ行ハレテ居タ関係上此ノ部落民ノ研究ハ特ニ興味アルモノ」として、掌紋の調査をおこなっている。なお、これについて筆者は、白川村の芦倉集落と加須良集落、白川村の平瀬集落と五箇山の西赤尾集落、桂集落、五箇山の相倉集落と見座集落、中畑集落といった通婚圏があることを聞き取り調査によって確認しているが、郷土史家の多志彌一〔1938, 48頁〕も白川村の平瀬集落や長瀬集落、御母衣集落、木谷集落などのいわゆる中切地方を血族結婚部落とはいえないと断言している。このように、遺伝学や体質人類学の研究は、郷土史とも相容れない歴史認識を前提として実施されていたが、古代からの人類学的な連続性を証明するものとして期待されていたのである。

3. 大家族制度に関するアカデミズムの論争

郷土史家による白川村研究に、比較的早くから強い批判を寄せたのは、マルクス主義経済学者の相川春喜である。相川〔1935a, 185-186頁〕によれば、「在来の諸家は、大家族制の『人口構成』や、

家内諸慣行の所謂『民俗学』の趣味に溺没して、その家族形態の真に歴史的な・構造的な型質の表面を滑つてゐる」、さらに「白川村大家族制の『起源』説を繞つて、村民定着の由来について源平を論じ、遺臣説、追放人説、朝鮮人移住説、土民説等々を問題とするの俗愚、徭役労働に基く家族協業の典型具現物たる大家屋に建築学的な興味をのみ満喫して、その具現物の具現物たる所以を忘れるの無観察、『大家族』の『人口構成』の量的な、或は血縁的な側面にのみ注意を奪はれ、その質的な身分的構成を見失ふの近視(傍点は原典のまま)、等々は『経済学者』の着眼では決してない」という。なお、彼による批判の矛先は郷土史家のみならず、アカデミズムに席を置く本庄榮治郎や福田徳三、後に紹介する小山隆や児玉幸多にも向けられた過激なものだった。

なお、白川村においては個々の大家族が広大な土地を所有していたわけではなく、したがって相川の議論は、大家族制の中に家内賦役制をみて、それを封建的農奴制の一典型とするものであるが[相川, 1935b, 184頁]、一方でマルクス主義の理論に基づいた既存研究への批判に終始しており、その根拠となる具体的な実証研究を途中で終えている。ここで紹介した彼の批判も、わずか2回の現地調査をもとに書き上げた具体例の乏しいものであった。そのため、赤木は「氏のいはゆる家内賦役制と大家屋の相互関係については、何ら具体的^(ママ)を説明を與へてゐないので、この儘では誰にも十分納得が行くまい」としつつ[同, 1936, 1頁]、「白川村の大家族制の實際を、かなり観念的に取り扱つてゐるのでは無いか」と疑問を呈している[同, 4頁]。

これに対し、結論としては相川に同調しつつ、その論理展開を発生原因からおこなったのが近世史学者の児玉幸多である。児玉は合掌屋根の家を村人の共同作業で作られるマタダテの遺物とみて、そこから柱のあるハシラダテの合掌造り民家に移行する条件を大工の存在と彼らを雇う経済的余裕とみたため[児玉, 1940a, 25-27頁]、合掌屋根の巨大な家屋を「大家族制度とは関係がないもの」と断言する[同, 27頁]。そのうえで、大家族制度発生の原因を近世の家抱^{けほう}に求めている[同, 24頁]。この家抱とは、生活状態の逼迫によって家族の内に持ち込まれた非血族関係を意味している。そして、彼は「米産額の最も少い飛騨国中にも、白川村は最も耕地の乏しい処で、大部分は焼畑(ナギ)であつて、家族一般の主食は稗と稗糠を混じた糠飯であり、その外に文字通り木の実草を混食する様な所に、全余剰を徴収する封建的収奪が加はつて来たことを考へなければならない」と述べ、大家族制度発生の原因を近世白川村の貧困に求めたのである[児玉, 1940b, 49頁]。

なお、児玉によるこれらの説は、後述する社会学者の小山隆に対する批判でもある。小山は、白川村中切地方が裕福であったため、大家族制度が発達したと述べている[家族問題研究会編, 1988]。同じ大家族制度に対して、その発生原因を貧しさと裕福さの相反する根拠によって説明する研究がほぼ同じ時期に出てしまったのは皮肉なことであるが、両者の違いは村内の経済格差の捉え方にある。つまり、児玉が白川村全体の生活状況を貧しいと表現しているのに対し、小山は白川村を上流から下流に向かって中切地方、大郷地方、山家地方に区分し、その中で大家族制度の発達した中切地方を裕福だと認識しているのである。実のところ、白川村は家ごと、集落ごとの経済格差が大きい。

これについて、上島[1952]は幕末から明治初年の白川村における集落別の農業生産性を比較しているが、1868(明治元)年の1戸当たり稗生産量をみると、南部の中切地方の牧集落が8.0石、長瀬集落が9.8石、御母衣集落が5.5石、平瀬集落が8.9石、木谷集落が7.2石、北部に位置する山家地方の内ヶ戸集落^{かづら}が11.1石、加須良集落^{うけがはら}が7.6石、椿原集落が8.0石、有家ヶ原集落^{うけがはら}が8.3石、

芦倉集落が8.6石であるのに対し、中部の大郷地方の大牧集落は2.1石、島集落が4.7石、鳩谷集落は2.3石、飯島集落は2.8石にすぎない[同、295頁]。また、養蚕についても、大郷地方は振るわず、山家地方の1戸当たり40貫以上、中切地方の20貫前後と大きな差があった[同、299頁]。そして、1869(明治2)年～1873(明治6)年において中切地方が41戸610人、山家地方が31戸320人であったのに対し、大郷地方は158戸1,150人もあったことから[大野郡白川村史編纂委員会編、1968、403頁]、白川村全体で農業生産性を平均化すると大郷地方の低い数値に強く引きずられてしまうのである。以上のように、地域の分析単位をどのように設定するかによって、経済状態を示すデータに大きな差が出たために、アカデミズムの間でも新たな論争が生まれてしまったのである。

また、児玉[1940a]が指摘した大家族における家抱の存在についても、溝口[1986、19頁]は「狭いながらも土地、屋敷を持っていたことは、身分的な問題をのぞいてほぼ本百姓から独立していた」と述べ、かつ「近世以降にさらに爆発的な焼畑の増加があった」こと[同、10頁]、抱層も本百姓に劣らないだけの開発をしていたこと[同、25頁]を明らかにしている。このように、児玉が分析対象にしていた江戸時代と小山が対象にしていた明治時代では、農業生産性や身分格差に大きな変化が生じており、それらが大家族制に対する認識の違いとなってあらわれ、両者の議論が平行線をたどった可能性は高い。

③……………五箇山研究の隆盛

1. 郷土史からの出発

五箇山の研究は、白川郷との地域比較という郷土史的な関心から始まった。なかでも、1932(昭和7)年から始まった高岡商業高等学校の小山隆、小寺廉吉、正木隆次郎による共同研究は、当初から地元富山の五箇山と岐阜県の白川村、荘川村をフィールドにしていた点で注目される。その理由として、小山[1933、94頁]は、「自然の地形によつて見れば、両地方は同一環境の内に置かれて居り、又生活内容、文化内容の多くの点についても、両地方が旧くから同一文化圏を形成して居た事が察せられる」と述べ、そこに五箇山と白川郷の家族制度を押しなべて研究する意義を見出している。彼のおもな研究方法は、戸籍簿を用いた集落別の人口統計分析であり、現在においても資料的な価値が高い。ただし、分析結果に対する解釈が、その後の研究で少しずつ変化しており、実証と理論の両方から様々な論争を呼び起こすことになる。

なお、小山[1933]の結論は、「此地方一般に見る大家族は、徳川幕府の採用した庶民のあらゆる生活固定化の政策によつて緊縛せられる様になつたところに、自ら生じた一種の変態的産物と見る事が、最も妥当の様である」というものであり[同、124頁]、その中の「一種の変態的産物」とは交通の制限や分家の制限、経済的生産力の進展性を指している[同、123頁]。そして、五箇山では人為の人口対策を徹底させた結果として大家族があまりみられなかったのに対し、白川郷では飢饉や疫病が無制限な家族の膨張を防いだと述べている[同、132頁]。

小山の研究の背景には、白川村の大家族を原始的な生活を送っているとする福田[1925、188頁]や、702(大寶2)年と1905(明治38)年の戸籍を比較して、白川村に上古からの風俗が残っていると

みた岡村 [1914]、遺跡の発掘をもって石器時代と大家族制の関係を論じた江馬 [1934] への強い批判がある。そこで、白川郷と五箇山をいったん同じ文化圏とした上で、「白川の中切及び山家の両地方のみが同一の大家族形態圏に属し、白川村大郷地方は荘川村及び五箇山地方と共に略、類似の別個の家族形態を為してゐた」と述べ [小山, 1936, 96 頁]、その違いを社会的経済的環境と経済的關係に求めた。

一方、正木 [1935, 5 頁] は、「水系庄川はその流域に形態を異にした段階的な民家圏四つを刻んで居り、一圈から他圏への移行の仕方は、恰も高度に従つて層々相重なる植物帯と同様な観を呈する」とし、庄川流域を荘川村の寄棟造りと、五箇山・白川の切妻圏、砺波散村の寄棟造り、中田町一戸出町一石動町を結ぶ入母屋圏の4つに区分して、河川と集落景観の関係を強調した。反対に、小寺は「大家族制の原因は、地理的環境の直接的な影響でもなく、或は経済的条件の直接的な影響でもない。(中略) 大家族制の直接的な原因は村落社会内の社会的諸関係そのものである」と結論づけている [小寺, 1934, 20 頁]。

筆者はこれら三者の中で、小寺の主張が最も現実的であると考えているが、実際には先に紹介した小山一児玉論争の方が目立っていた。その小山一児玉論争も、郷土史家の米沢康 [1962, 67 頁] が児玉支持を表明したように、児玉説の方がやや優勢であったが、前述したような分析に用いた地域単位や時代設定の違いなどによって結論が曖昧になったままである。そして、1930 (昭和5) 年に竣工した祖山ダムが様々な社会問題を引き起こすと、学問的な関心はダム開発による地域変化に移っていった。

2. ダム開発による集落の変貌

富山県はもともと税収の面から電源開発に積極的な姿勢をみせており、電力会社が勾配の急な庄川をその対象として、下流から上流に向かって次々とダムを建設していくことに協力的であった。そして、庄川下流域にも1925 (大正14) 年から庄川町 (現・砺波市) の小牧ダムが着工したが、続く平村の祖山ダム建設計画については、訴訟問題が起こった。それを当時は「庄川問題」と呼んだ。訴訟を起こしたのは、岐阜県八幡町 (現・郡上市) の飛州木材株式会社である。この飛州木材株式会社は、庄川流域上流で伐採した木材を庄川に流して富山湾方面に出荷していたため、祖山ダムの開発が木材の輸送を妨げるとの理由で訴訟を起こし、かつ多額の補償金を要求するために祖山集落とその周辺の土地を次々と買収していったのである。

この庄川問題については、近年でもたびたび研究上の再検討がおこなわれている。例えば、安達・髭本・北浦 [1998] は、小牧ダム建設時の流木争議について、犠牲に対する恩恵が大きいと評価し、鈴木 [2001] は、富山県が水力発電を推進する中で庄川の流木問題が発生した歴史的経緯を追っている。また、勝野 [2002] は、祖山ダム建設反対運動の中心人物である飛州木材株式会社の平野増吉に焦点を当て、高木 [2007] は、庄川問題における紛争の展開や訴訟の経過、判決の根拠について分析を試みた。近年に至っても、庄川問題に関する研究が継続する背景には、五箇山・白川郷という観光地化された地域的な関心と、それまで類例の少なかった訴訟に対し、裁判所がどのような理論を構築して判決を下したのか、またその社会的影響はどれだけのものだったのかという問題関心がある。

聞き取り調査によると、五箇山では私有地の森林が多く、あまり林業が盛んでなかったが、白川郷では共有林が多く、村外の木材業者に伐採の許可を与えて、土地の使用料を徴収していた。このため、五箇山での建設を計画したダムであるにも関わらず、岐阜県の材木業者が庄川を継続的に利用するために訴訟を起こしたのである。そして、ダム建設予定地の祖山の人々がおおむね開発を好意的に受け入れたのに対し、白川村、莊川村、清見村、利賀村の4村と上平村の森林組合が飛州木材の行政訴訟に参加した〔野間、1935b、114頁〕。

それが、一転して岐阜県側が電力会社に協力するようになったのは、同社から県に莫大な寄付があったからだという〔野間、1935b、115頁〕。そして、飛州木材株式会社は有力な支持者を失い、裁判で事実上の敗訴をした。祖山ダムの建設後には、小原ダムや成出ダムなどのダム開発が相次ぎ、五箇山の景観と生活は、水没による家屋の移動や道路建設、電気の普及などによって大きく変貌していった（表4）。なお、その影響を小山〔1935、386頁〕は、「庄川峡に新に構築された二大堰堤と発電事業とが、五箇山の中でも特に平村の生活に多大の変化を齎したやうにも見られるが、然しその事が五箇山の住民を再び此の土地に定着せしめるに至つたと考えるならば、それは思ひ過しと云はねばならない」と過小評価したが、同僚の小寺はこれを問題視して、ダム開発と人口、生活、景観の変貌について数多くの研究成果を残した。

実際にも、ダム開発の恩恵を受けた集落と受けなかった集落の間に見られる近代化の格差は大きい。ダムを建設することになれば、建設用の資材を運ぶための道路が整備され、一時的ではあるが、数多くの労働者が流入して、地域が活性化される。また、様々な補償金を受けられるので、合掌造りの屋根をおろして、近代的な家屋に住むことができる。さらに、電気が引かれて、快適な生活が送れるようになる。祖山ダム建設の際には、下梨集落から渡原集落までを「ささ舟」と呼ばれる手漕ぎ船が、渡原集落から下流に向かって「ポンポン舟」と呼ばれる動力船が運行し、河川交通が便利になった。一方、ダムの建設計画から外れた五箇山の梨谷集落や桂集落、白川村の加須良集落や牛首集落、ダム建設に反対した白川村荻町集落、鳩谷集落などは、電灯の敷設からしばらく取り

表4 庄川流域のダム建設

	建設時の市町村	現在の市町村	着工	竣工	総貯水容量 (千m ³)	有効貯水容量 (千m ³)
小牧ダム	庄川町	砺波市	1925年	1930年	37,957	18,858
祖山ダム	平村	南砺市	1927年	1930年	33,850	9,205
小原ダム	上平村	南砺市	1939年	1942年	11,741	5,099
成出ダム	上平村	南砺市	1943年	1951年	9,709	3,186
赤尾ダム	上平村	南砺市	1974年	1978年	1,465	749
境川ダム	上平村	南砺市	1973年	1993年	59,900	56,100
椿原ダム	白川村	白川村	1952年	1953年	22,274	5,788
鳩谷ダム	白川村	白川村	1954年	1956年	33,539	4,387
御母衣ダム	白川村	白川村	1957年	1961年	370,000	330,000
大白川ダム	白川村	白川村	1961年	1963年	14,200	11,000
白水ダム	白川村	白川村	1963年	1963年	29,290	9,290

資料：日本ダム協会ホームページ <http://damnet.or.jp/> (2013年9月23日最終確認)

残されてしまった〔三浦, 1936, 25頁〕。

ただし、ダム開発による経済的な繁栄は長く続かない。図2をみても、村別の人口に大きな変動のあることが認められる。平村の人口が1930（昭和5）年に急増しているのは、1927（昭和2）年に着工、1930（昭和5）年に竣工した祖山ダムの影響による。ところが、ダム建設を終えてしまうと、土木建設業の就業者たちは次の建設現場へと移動する。そのため、平村の人口は祖山ダム竣工直後の1935（昭和10）年に急減し、その一方で1939（昭和14）年に着工、1942（昭和17）年に竣工した小原ダム、1943（昭和18）年に着工、戦争で一時建設を中断して1951（昭和26）年に竣工した成出ダムの^{なるで}ある上平村の人口が一時的に急増した。その後は上平村の人口も減り、代わって白川村の人口が1950（昭和25）年から1960（昭和35）年にかけて大幅に増えた。これは、1952（昭和27）年に着工、1953（昭和28）年に竣工した椿原ダム、1954（昭和29）年に着工し、1956（昭和31）年に竣工した鳩谷ダム、1957（昭和32）年に着工し、1961（昭和36）年に竣工した御母衣ダムの影響による。そして、ダム建設中はその周辺に仮住まいのバラックが立ち並び、商店や飲食店、パチンコ屋、劇場などができて、成出銀座や椿原銀座、平瀬銀座、御母衣銀座などの小さな繁華街が形成されては、消えていった。

さらに、当時のダム開発は観光資源としても注目された。例えば、小牧ダムの建設によって集落が水没した後、大牧温泉は庄川を挟んで国道156号線の反対側にある断崖絶壁の間に取り残されたが、国道からダム湖を遊覧船で渡る1軒宿として注目された。また、祖山ダムやその建設に伴って飛州木材株式会社の材木を庄川下流域へ流すために設けられた見座^{みざ}の貯木場、椿原ダムが建設された椿原集落などは、絵葉書になって販売された（写真3）。そして、庄川峡は道路が整備され、電気が通ったこともあって、観光化が少しずつ進んでいった。

反対に、ダム開発の被害を受けた事例も少なくない。五箇山では、祖山ダムの建設によって、^{おおくずしま}大崩島集落、^{しもなし}下梨集落、大島集落の一部が水没している。実際にも、それらの集落は祖山ダム建設によって庄川の水位が上昇したため、洪水の被害を受けた（写真4）。また、小原ダムの建設に

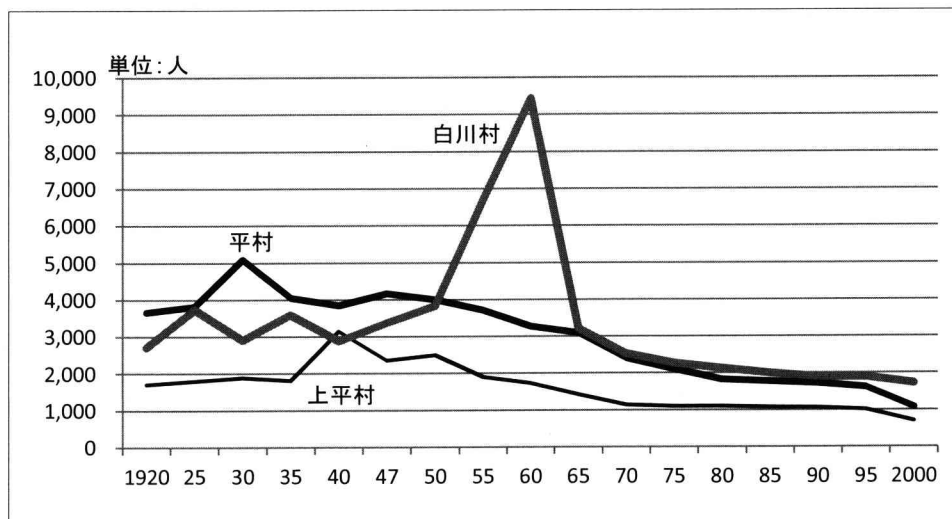
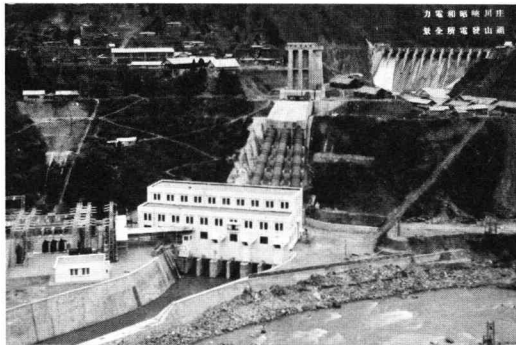


図2 五箇山・白川郷の村別人口推移
資料：国勢調査報告

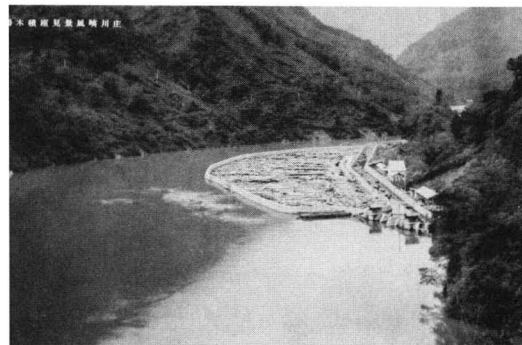
よって^{むくらじま}葎島集落は全戸水没し、ダム北側の高台に移転した。さらに、小原ダム建設の影響によって庄川の水位が上昇したため、葎島集落の上流に位置する細島集落や菅沼集落でも河川と耕地の高低差がほとんどなくなり、漆谷集落と西赤尾集落の間でも多数の家屋が水害回避のために移転した、水没しなくても、ダム建設地の成出集落や白川村の椿原集落では全戸移転⁽⁶⁾している。さらに白川村では、鳩谷ダムの建設によって大牧集落が、御母衣ダムの建設によって^{おがみ}尾神集落がともに水没し、牧集落や福島集落、秋町集落も御母衣ダム建設によって廃村に至った。

ダム建設の影響はそれだけにとどまらない。ダムの建設には、資材を運ぶための道路が必要となり、かつ既設の道路を付け替える必要が出てくる。例えば、五箇山の見座集落は、祖山ダム建設による湛水の影響を受けない高台に位置しているが、それに伴う国道改良事業によって家屋や蔵を移転させ、景観を劇的に変えた(写真5)。皆^{かいむくら}葎集落は、水没を免れたものの、ダム建設の資材置き場にするために民家を移転させた。白川村の保木^{ほきわき}脇集落も国道改良事業に伴うトンネル工事によって民家を移転させている。

以上のような経緯から、五箇山と白川郷ではダム建設とそれに伴う国道改良事業によって数多くの集落ないし民家が移転し、さらにはその補償金によって合掌造りの屋根を次々と下していった。



昭和初期の祖山集落
出典：絵葉書「庄川はがき」、本館蔵

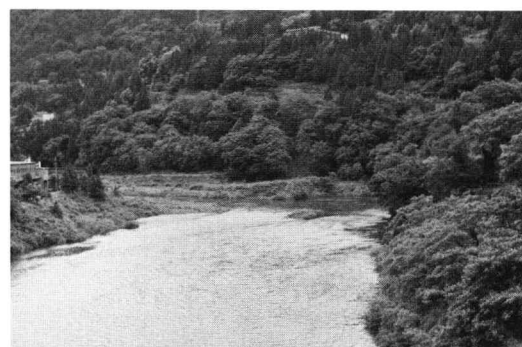


昭和初期の見座の貯木場
出典：絵葉書「庄川はがき」、本館蔵

写真3 祖山ダムの建設をきっかけとして作られた絵葉書



湛水した下梨集落の一部 1931(昭和6)-1934(昭和9)年
南砺市立平岡図書館蔵



家屋移転後の様子
2012(平成24)年6月撮影

写真4 湛水した下梨集落の当時と現在



国道改良前の見座集落 1932(昭和7)年
南砺市立平図書館所蔵



現在の見座集落 中央奥に家が建っていた基礎がみえる
2011(平成23)年11月撮影

写真5 国道改良前後の見座集落

合掌造りの屋根を下すことは、近代化を果たした証しであり、各戸は隣の家が合掌造りの屋根を下せば、追いつかれてなるものかといわんばかりに追随したのである。そして、合掌造りの民家は、祖山ダム建設以降、急速に減っていった。

他にも、合掌造りの民家を急減させた原因として、産業構成の大きな変化をあげておかなければならない。1920(大正9)年の『国勢調査報告』によると、農業の就業者の割合は、平村で90.1%、上平村で92.5%、白川村で79.8%であった。そして、平村では南瓜や大根、馬鈴薯、蕪青などを作りながら、養蚕や製糸、和紙製造を副業として生計を営んでいた(表5)。一方、白川村は大根、蕪青、稗を作りながら、養蚕を副業としてきた(表6)。ところが、1950(昭和25)年になると、農業の就業者の割合は平村で63.7%、上平村で49.0%、白川村で60.0%にまで落ち込む(表7)。その後、白川村では1960(昭和35)年に農業の就業者が12.0%にまで低下するが、その原因は御母衣ダム建設に伴って大量の建設業の就業者が流入したことによる。ただし、白川村以外でも農業の就業者が減って、建設業の就業者が増えた傾向は共通しており、ここに五箇山と白川郷が農業中心から公共事業に依存した経済基盤に移行していったことを読み取れる。

それに加えて、大正時代以降は、農繁期の春季から秋季にかけて大阪方面へ出稼ぎに行く世帯が増えていったという。そのような出稼ぎ労働者も、冬季には雪下ろしのために

帰郷するが、これらの地域において、農業離れは焼畑の衰退を意味する。もともと五箇山と白川郷では、焼畑で粟や稗、大豆などを栽培した後にカリヤス、通称コガヤを育てて合掌造りの茅葺きに利用していた。それが、焼畑をやらなくなったことで、コガヤ不足を招き、合掌造りの屋根を維持することが困難になっていったのである。

さらに、大正後期以降における養蚕の

表5 1909(明治42)年の平村における農産物生産高

	作付 (反)	収穫 (石)		作付 (反)	収穫 (貫)
米	88	179	甘藷	7	1,820
麦	107	102	馬鈴薯	70	14,000
大豆	250	330	南瓜	162	65,000
小豆	140	100	西瓜	0	20
粟	50	50	茄子	4	650
稗	500	675	大根	144	57,600
黍	35	53	蕪青	33	8,750
蕎麦	58	87	葱	2	30
玉蜀黍	66	120	人参	-	400

資料：平村史編纂委員会編『平村史 下巻』、平村、1983

衰退と1戸当たり世帯員数の減少は、合掌造りを積極的に維持する動機を失わせた。前者については、合掌造り民家が釘を一切使わず、ネソとよばれるマンサクの細い幹と縄で固定してあるため、養蚕の経営規模に合わせて比較的容易に拡張できたという利点があげられる。中には5階建ての合掌造り民家まであるが、それは空間を伸縮する必要性に柔軟な対応をできる構造であったことを示す。ところが、養蚕が衰退すれば、空間の伸縮性を保つ必要はなくなる。

一方の後者については、合掌造り民家が、地元住民から不動産ではなく動産だと言われるほど、しばしば移築されてきたことに

注目しなければならない。相倉集落で聞いた話によると、隣接する見座集落や中畑集落の間では、世帯員数の変化に伴って、合掌造り民家の交換が何度かおこなわれてきたという。つまり、大きな民家に住む世帯員数の少ない家族と、小さな民家に住む世帯員数の多い家族との間で家屋を移築して、住まいを交換できるような柔軟性が合掌造り民家にはあった。ところが、大家族の世帯数が全体的に減ってしまえば、交換可能な民家を残す必要はなくなる。

このため、合掌造りの屋根が消滅してしまうという危機感は、昭和初期から存在していた。実際にも、濱田[1936, 7頁]は「何れそのうちに大家族制は全く崩壊し、斯かる家屋もなくなるであろうから、(中略)一つよい標本を移置して保存す可きであらう」と述べている。しかし、当時はダム開発によってエネルギー需要を満たすことが優先され、合掌造り民家の保存はおこなわれなかった。その計画が具体的に進んでいくのは、1950年代以降のことである。

表6 1910(明治43)年の白川村における農産物生産高

	作付 (反)	収穫 (石)		作付 (反)	収穫 (貫)
梗米	787	869	玉蜀黍	10	10
糯米	52	49	甘藷	2	580
大麦	65	38	馬鈴薯	98	6,650
小麦	120	75	生百合	1	45
大豆	419	217	大根	110	38,450
小豆	52	28	蕪青	16	5,992
豌豆	10	7	人参	370	32
粟	290	138	葱	90	10
稗	3,890	3,682	牛蒡	338	33
黍	14	11	胡瓜	110	12
蕎麦	315	156	南瓜	65	6,435

資料：大野郡白川村史編纂委員会編『白川村史』、大野郡白川村、1968

表7 五箇山と白川郷における産業構成の変化①

	平村							上平村						
	農業	林業・狩猟業	建設業	製造業	卸売・小売業	サービス業	その他	農業	林業・狩猟業	建設業	製造業	卸売・小売業	サービス業	その他
1950	63.7	10.3	9.0	3.5	2.2	4.3	9.3	49.0	7.4	23.5	0.5	3.2	3.0	16.6
55	46.5	16.6	15.2	4.2	3.6	4.8	12.7	54.9	18.3	10.7	0.3	2.0	4.8	11.1
60	44.6	17.4	18.8	1.8	4.9	7.0	10.4	47.5	13	22.5	0.9	1.9	7.2	8.9
65	33.6	9.4	36.8	2.5	3.9	7.9	9.8	38.9	9.3	23.9	1.2	5.7	10.7	16.0
70	24.8	5.2	32.6	11.7	5.6	11.3	14.3	33.9	2.7	21.7	12.8	2.5	17.2	11.7
75	16.4	2.5	38.8	11.5	5.4	15.7	15.1	16.7	1.8	33.0	12.1	4.4	20.2	16.1
80	14.1	2.3	30.7	17.2	7.4	18.8	16.8	8.5	0.3	41.3	11.4	5.3	22.5	16.0
85	8.4	0.9	29.6	19.8	9.4	22.0	19.3	7.8	0.4	36.8	12.9	7.1	22.2	19.9
90	6.8	0.6	27.4	18.5	10.6	25.5	21.1	5.8	0.0	46.5	8.4	8.4	21.7	17.5

資料：国勢調査報告

表7 五箇山と白川郷における産業構成の変化②

	利賀村							荘川村						
	農業	林業・狩猟業	建設業	製造業	卸売・小売業	サービス業	その他	農業	林業・狩猟業	建設業	製造業	卸売・小売業	サービス業	その他
1950	61.7	19.7	8.3	1.8	0.6	3.6	4.8	73.2	7.9	2.0	5.6	2.9	4.2	7.1
55	49.6	26.6	8.2	3.3	1.2	6.2	6.2	62.4	14.0	3.1	6.0	4.4	5.1	9.4
60	50.8	27.2	8.9	4.0	1.4	3.9	5.2	36.4	12.4	33.5	3.4	4.1	5.2	9.1
65	38.6	19.9	23.4	5.7	1.2	5.9	6.5	38.3	22.5	13.8	6.8	3.8	7.4	11.1
70	28.9	12.4	26.0	12.0	2.8	9.7	11.1	38.3	9.7	29.9	4.9	4.4	6.6	10.5
75	15.3	4.6	27.8	13.8	2.9	20.8	17.7	25.9	17.6	12.8	7.7	7.2	19.2	16.8
80	7.9	1.8	31.3	13.5	3.8	25.1	20.3	18.0	16.0	12.2	7.7	9.4	26.4	19.7
85	7.4	1.1	31.5	12.6	4.7	28.1	19.3	18.0	12.4	11.2	9.6	10.1	29.3	19.6
90	7.4	0.4	24.6	14.9	5.2	30.3	22.3	17.7	5.5	10.7	10.0	11.7	32.9	23.1

	白川村						
	農業	林業・狩猟業	建設業	製造業	卸売・小売業	サービス業	その他
1950	60.0	4.3	23.7	1.3	1.7	3.2	7.5
55	21.0	2.8	55.5	1.3	4.5	4.5	14.9
60	12.0	1.8	59.4	0.6	6.5	14.7	11.4
65	37.0	2.1	22.4	3.1	7.9	14.6	20.8
70	30.6	4.1	21.5	6.2	7.8	12.7	25.0
75	18.9	1.0	23.8	12.7	9.5	19.0	24.7
80	14.6	2.9	22.4	8.2	12.6	21.7	30.1
85	7.9	2.5	25.0	10.1	15.0	24.5	30.0
90	5.1	0.9	23.9	10.3	17.3	26.4	33.4

資料：国勢調査報告

④……………合掌造りの文化財化と観光化

1. 建築史学的研究の復活と合掌造り民家の文化財化

戦中から1950年頃にかけて、五箇山・白川郷研究は一時停滞する。それが、1951（昭和26）年に文部省の文化財保護委員会が重要文化財を指定するため、各都道府県に代表的民家の報告を求め⁽⁷⁾る前後から、合掌造り民家の建築史学的な研究が再開される。実際にも、この文化財保護委員会の援助を受けた農村建築研究会歴史部会〔1951a-h〕が共同研究を開始し、白川村の合掌造り民家における農業生産や生活基盤、そして建築技術の面からみた調査をおこなっている。ただし、当時はまだ竹内〔1948, 35頁〕が「独り庄川流域の常民の家造りだけが、千戸の秘密を蔵するものであるかの如き言を放送して、世人をして錯誤に墮し入れしむることは慎まなければならない」と述べる一方で、石原〔1950, 11・13頁〕は、五箇山の相倉集落や梨谷集落に原始的な感じを受けるとし、特に相倉集落の合掌小屋をみて、それが天地根元造りの原始住宅であるか否か悩んでいたように、合掌造り民家が古代の名残であるという旧来からの説を引きずっている状況であった。

なお、この農村建築研究会歴史部会〔1951a-h〕の成果については、稲垣〔1952, 1953, 1954〕が再検討し、補足説明をしている。具体的には、江戸時代の白川村における人口や所有石高、家屋の再

建に際して提供された労働力、1951（昭和26）年の集落別草葺家屋数などについて詳細なデータを提示し、解説を加えている。この研究をきっかけとして、集落ごとの屋根の種類を数量的に把握する試みが進んでいったといってもよい。

ただし、文化財保護委員会の要求を受けた庄川流域での調査は、上流の荘川村・白川村から下流の五箇山へと向かう計画を立てたため、1952（昭和27）年に着工した白川村北部の椿原ダム建設によって五箇山へ抜けられなくなり、一時中断する。そして、五箇山での民家調査は、1956（昭和31）年に開始された。

そのうち、1951（昭和26）年から調査を開始した白川村における集落別の合掌造り民家戸数は、表8の通りである。この表をみると、荻町集落と飯島集落における合掌造り民家の戸数が目立つのであるが、文化財指定の候補として重視されていたのは戸数よりも家屋の古さや大きさ、構造の特殊性であった。当時の文化財保護制度においては、現在のような面的な景観保護の必要性を意識しておらず、あくまでも建築史的にみた個別の希少価値に重要性を見出していた。そのような価値

観の中で、文化財として候補にあがったのは、小さな集落にありながらも家屋の大きかった御母衣集落の大戸家と遠山家、長瀬集落の中谷家と山下家、有家ヶ原集落の北家、芦倉集落の東家と中谷家などである。

ところが、文化財に指定されると、建て替えや補修に様々な制約が課せられるため、その候補となった民家は、生活の不便を予測して文化財指定を相次いで拒否した。唯一、御母衣集落の大戸家だけが1956（昭和31）年に重要文化財の指定を受け入れたが、早々に後悔して家屋を下呂に移築している。また、同じ御母衣集落の遠山家が長らく文化財指定を拒否していたが、後述する観光化の進展によって、1971（昭和46）年に文化財指定を受け入れた。その他は、文化財として指定されないまま、長瀬集落の中谷家と山下家が1956（昭和31）年に調布市と川崎市にそれぞれ移築され、有家ヶ原集落の北家が1965（昭和40）年に荻町集落へ移築された。芦倉集落の中谷家は1965（昭和40）年に片津山温泉へ、東家は1967（昭和42）年に下呂温泉へ移築されている。このように、皮肉なことではあるが、合掌造り民家を残したいという文化財保護委員会の目的は、かえって合掌造り民家の減少を促進した可能性が高い。

実際にも平村を事例としてみると、文化財保

表8 白川村における集落別の合掌造り民家戸数

	1951年	1963年	1973年
小白川	4	3	0
芦倉	不明	5	1
加須良	8	8	離村
椿原	8	0	0
有家ヶ原	3	3	1
下田	不明	不明	5
飯島	41	30	19
島	9	7	20
戸ヶ野	不明	不明	
牛首	8	6	離村
鳩谷	18	12	5
荻町	88	70	59
大窪	4	3	4
馬狩	8	7	離村
大牧	19	水没	水没
野谷	4	0	0
保木脇	6	0	0
木谷	6	3	1
稗田	4	不明	0
長瀬	6	2	1
平瀬	2	2	2
御母衣	5	3	2
牧	3	0	離村
福島	2	離村	離村
秋町	1	離村	離村
尾神	2	水没	水没
合掌村	-	-	4

資料：『昭和49年度白川村荻町伝統的建造物群保存地区調査報告書』、岐阜県大野郡白川村教育委員会、1975

護委員会の調査が開始された1951(昭和26)年においては、^{かごとく}籠渡や^{くるす}来栖、^{なかに}相倉、^{なかに}見座、^{なかばたけ}中畑、^{こぐるす}小来栖、^{なしたに}上松尾、^{すがわ}梨谷、^{すがわ}寿川といった各集落で数多くの合掌造り民家が残っていた(表9)。それからわずか3年で、平村の合掌造り民家数は317軒からおよそ4分の3の242軒にまで急減しており、とくに平坦地で都市化が早く進んだ下梨集落や大島集落、ダム開発の影響を直接受けた祖山集落でその傾向が強くみられた(図3)。このように、現実問題として合掌造り民家を個別に保存す

表9 1951(昭和26)年9月の平村における住居の屋根

	下梨	大島	籠渡	来栖	上梨	田向	相倉	見座	中畑	小来栖	上松尾	田代	入谷	東中江	下出	高草嶺
合掌造り	18	24	26	14	23	12	33	20	12	21	11	4	16	6	17	13
茅葺き	3	4	3	2	4	5	6	3	2	1	1	0	1	0	3	0
瓦葺き	21	9	1	1	4	3	1	0	0	4	0	0	0	2	1	2
トタン葺き	27	0	1	0	7	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0
石置割板葺き	22	7	2	0	6	1	0	0	0	2	0	0	1	0	11	10
杉皮葺き	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
土居葺き	20	9	0	1	8	5	0	2	2	2	0	1	0	11	5	7
計	118	56	33	18	52	26	40	25	17	30	12	5	18	20	40	33

	夏焼	入谷	寿川	大崩島	杉尾	渡原	祖山	計
合掌造り	4	8	8	5	8	0	14	317
茅葺き	0	2	2	2	6	0	0	50
瓦葺き	0	0	0	3	0	1	7	60
トタン葺き	0	0	0	0	0	0	0	38
石置割板葺き	0	2	0	0	0	0	0	64
杉皮葺き	0	2	1	0	0	0	0	16
土居葺き	1	5	0	1	1	4	7	92
計	5	19	11	11	15	5	28	637

資料：平村『村勢要覧』, 1954

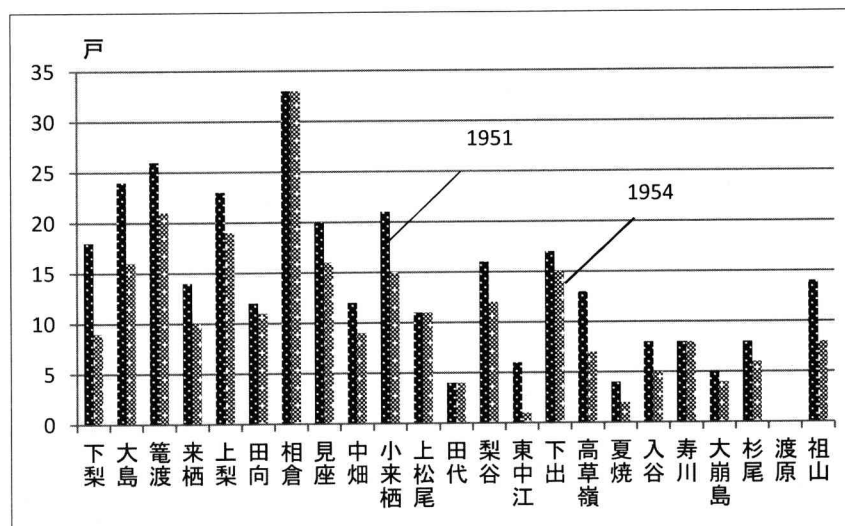


図3 1951(昭和26)年と1954(昭和29)年の平村における合掌造り民家の戸数

資料：文化財保護委員会「富山県五箇山民家予備調査報告」, 1931

る試みが難航する中、保存の手段がより強制力の強い面的な方向へと移行していった。そして、文化財保護委員会が、平村と上平村に対して面的な強制力のある史跡指定の候補としてそれぞれ1集落ずつの候補をあげて欲しいとの要望を出し、その返答として平村が相倉集落を、上平村が菅沼集落を候補地にして、1966（昭和41）年に内定を、1970（昭和45）年に指定を受けた。

当時、合掌造り民家を数多く残していたのは、ダム開発による水害補償金を受けていない集落であった。そして、史跡指定の候補は、相倉集落や菅沼集落以外にもあった。とくに平村の籠渡集落は、大きな合掌造り民家が緩やかな斜面に点在していて、風景としての見栄えがよいことから、かつて撮影スポットとして人気があり、史跡指定の有力候補になっていた（写真1）。だが、指定後に民家とその周辺のあらゆる建造物の改変が大きく制約されるため、史跡指定の候補を拒否する集落が出てきた。実際にも、籠渡集落では1950年代末から、合掌造りの屋根を下す民家が急増している

（図4）。そのような状況下で、例えば相倉集落が史跡指定を受けたのは、春から秋にかけて大阪方面に出稼ぎをする人々が多く、民家を改築する必要性があまりなかったからだという。

もちろん、それ以外にも合掌造り民家を活用した観光化に期待していた側面はある。例えば、『国勢調査報告』によって平村の産業別就業者数の割合をみていくと、1950（昭和25）年には農業63.7%、林業・狩猟業10.3%、建設業9.0%だったのが、1960（昭和35）年には農業44.6%、林業・狩猟業17.4%、建設業18.8%、

1965（昭和40）年には農業33.6%、林業・狩猟業9.4%、建設業36.8%、1970（昭和45）年には農業24.8%、林業・狩猟業5.2%、建設業32.6%へと推移している（図5）。つまり、平村においては、1950（昭和25）年から1970（昭和45）年のわずか20年間で農業が基幹産業としての地位を失い、1955（昭和

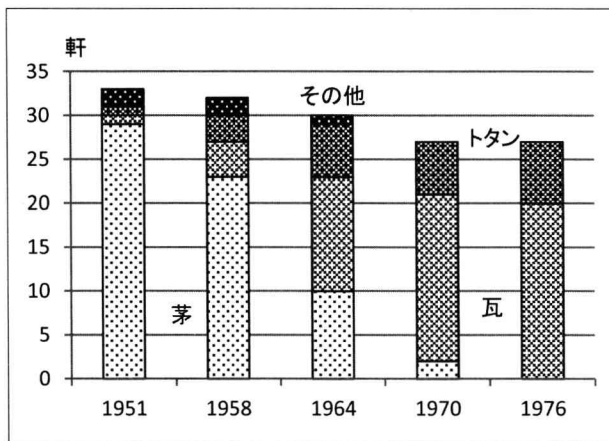


図4 籠渡集落における屋根の分布

資料：平村史編集委員会編『平村史 下巻』，平村，1983
注：住宅以外の建物を含む。

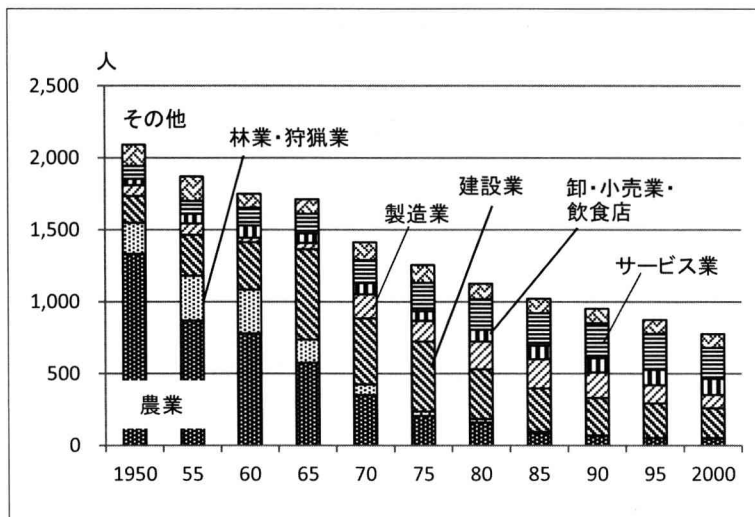


図5 平村における産業大分類別就業者数の推移

資料：国勢調査報告
注：15歳以上就業者数の値。

30) 年から1960(昭和35)年にかけて林業・狩猟業が木炭やパルプなどの需要増加によって就業機会を一時的に増やしたが、1965(昭和40)年以降に衰退の一途をたどっている。それらに代わって、とくに平村の大きな就業機会となっていたのは、建設業であった。実際にも1953(昭和28)年に岐阜市と高岡市を結ぶ庄川沿岸道路が県道から二級国道(156号線)に昇格され、1961(昭和36)

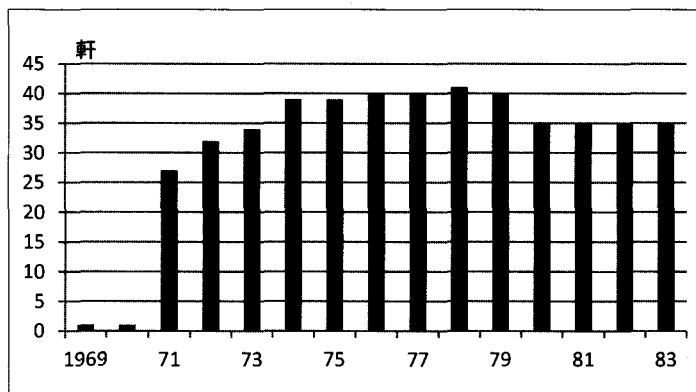


図6 平村における民宿軒数の推移
資料：平村史編集委員会『平村史上巻』, 平村, 1980

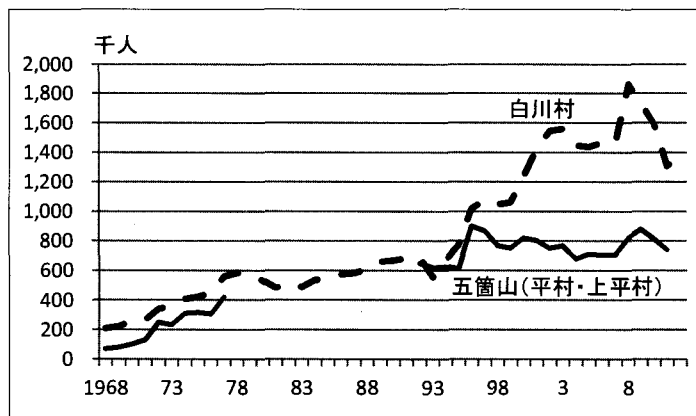


図7 五箇山と白川村の観光客入込数
資料：「富山県観光客入込数」, 「白川村観光客入込客数」, 平村『史跡越中五箇山相倉集落保存管理計画策定報告書』, 1977

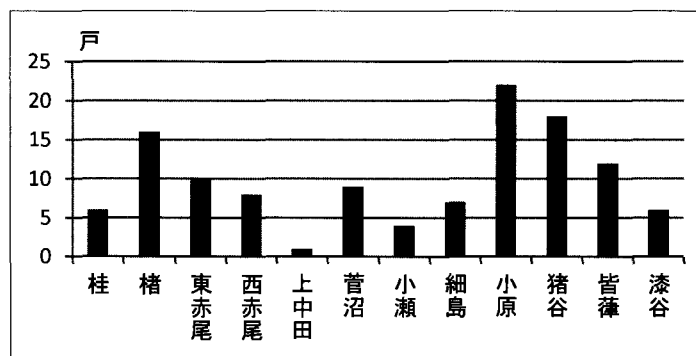


図8 1956(昭和31)年の上平村における合掌造り民家の戸数
資料：文化財保護委員会『富山県五箇山民家予備調査報告』, 1956

年に二級国道岐阜—高岡線改良期成同盟会が結成されると、本格的な国道改良事業が開始された。

ところが、建設業の就業者数も1965(昭和40)年をピークとして、その後減少していく。そして、村全体の就業機会が急速に少なくなっていく中、合掌造り民家を活用した観光業を営もうとする試みがみられるようになっていった。例えば、上平村小瀬集落の羽馬家は、かつて養蚕や焰硝製造で栄えた富豪であったが、その贅沢を尽くした合掌造りの大きな民家を維持するため、1969(昭和44)年からユースホステルを運営していた⁽⁸⁾。また、翌年の1970(昭和45)年に相倉集落が史跡指定を受けると、平村では同集落を中心として民宿が急増した(図6)。これは、史跡の内定から指定に至る約4年間に観光化へ向けた十分な準備をしていた結果と考えられる。一方、上平村では、旧運輸省の補助金を受けて廃屋となった合掌造り民家を菅沼集落のすぐそばに移築し、「五箇山青少年旅行村 合掌の里」という観光施設を1973(昭和48)

年に竣工した。そして、五箇山の観光客数は少しずつ増えていったのである（図7）。

それでも、史跡指定を受けながら合掌造り民家で民宿を始めるには、法律で改築や増築に強い制約が課せられるため、世帯員数を減らして部屋を空ける必要があった。それに加え、民宿を経営すると、出稼ぎなどの副業が時間的に制限されるため、若い世代は集落を出ていった。その後、相倉集落では史跡指定による観光化を進めながらも、過疎化が深刻化していった。一方、菅沼集落は面積が小さく、合掌造り民家の戸数がもともと少なかった（図8）。その代わり、隣接する「五箇山青少年旅行村 合掌の里」が安価で泊まれる宿泊機能やキャンプ場を備えており、収容力の小さな菅沼集落の観光機能を補っている。

なお、五箇山がこの当時からそれまでの合掌造り民家に大きな増改築をせず、安価な観光を提供してきたことは注目に値する。これは、主要な観光の舞台となった相倉集落と菅沼集落の戸数や世帯人員が少ないことと強く関係しているが、集落規模が小さければ、宿泊施設や駐車場の収容量も必然的に小さくなる。このため、五箇山では後にみる白川郷の荻町集落ほど大規模な観光開発を実施してこなかった。むしろ、観光業で合掌造り民家を維持するための副業収入を得られればよいという雰囲気があり、そのことが思い切った観光化に進んでいかなかった原因と考えられる。

2. 大家族制研究の復活

1950年代初頭から合掌造り民家の建築史的な研究が再開されると、それにやや遅れて大家族制度の研究が復活する。ただし、戦前と異なるのは、白川村の大家族制度を古代ないし中近世から続く古いこと、あるいは特殊なこととみるのではなく、家制度や共同体論、明治民法などに引きつけて論じるようになったことである。

例えば、福島[1954, 3頁]は、白川村について「半封建的な農村と独特な家長制をもつ日本が、絶対主義政権の殖産興業政策を通じて一躍高い資本主義に進んだ時、農村社会の普遍的に受けた運命をこの村はとりわけ強く身に受けた」と述べ、その制度的な歴史変化に着目している。福島がとくに重要視したのは、明治後期以降における大家族制度の崩壊であり、そのおもな原因であった岐阜県の高山や北海道への村外分家であり、日雇いによる現金収入源となった発電所の建設事業であった。それらによる家の独立が、大家族を崩壊させたと福島はみたのである。もちろん、他地域への人口流出や建設事業による就業機会の増加は、小寺廉吉や小山隆が五箇山をおもな事例としてすでに指摘してきたことではあるが、それらを白川村の大家族制度に当てはめて、家制度と共同体の崩壊という当時の法制史学や農村社会学に共通した関心事へと議論を引きつけていった点に福島の独自性がある。

同様に、家制度と共同体論を軸とした大家族制度の研究としては、玉城[1959]が重要である。なお、1950年代中頃以降になっても、松野[1955, 75頁]が「白川村の大家族制の成立は封建的収奪によって成立したものでなく既にそれ以前から古代的伝習の中に存在し」たものと再考し、反対に玉城[1959, 2頁]が「白川村に大家族が形成されたのは、それほど古い時代ではなく比較的新しい時代ではないかということ、学者によつてはその大家族を原始共産体の名残りとか、日本における母権性の名残り」と評価しているものもあるが、そのようなことはあり得ないであろう」と述べている。このように、当時は白川村の大家族制度を古代からの遺制とみる考え方が残っており、それに対す

る批判として、大家族制度の研究が復活した側面もあったと考えられる。

その玉城は、「白川村における大家族が、比較的新しい時代、すなわち徳川封建制下に形成され、それが明治維新後の或る時期まで残存したことは事実だつたにしても、その解体、変形の過程については、今まであまり報告されていないけれども、私にとつては最も重大な関心事であった」としながら [1959, 3 頁], 「敗戦後における民法改正（それがどんなに形式的であるにもせよ）の影響や、農地改革などの影響が、白川村の家族集団にどのように作用したのであろうかを明らかにすることが重要である」と述べている [同, 4 頁]。この問題意識は福島とほぼ共通するが、玉城 [同, 242 頁] はさらに、「白川村における大家族の形成も一般的なものではなく、特定の地帯における特定の家族にのみ形成されたのである」とまとめ、その根拠を養蚕、製糸等の副業経営が大規模におこなわれていたことに求めた。玉城の研究は、それまでの白川村の大家族制度研究を総括するような、おおよそ妥当な内容であり、このテーマを主題とした研究はその後しばらくみられなくなる。

なぜなら、このような家制度や共同体論の枠組みで白川村の大家族制度について論じることは、それを郷土史としての特殊性から引き離し、理論的・制度論的研究の中に吸収してしまうことを意味したからである。そして、白川村の大家族制度は、この研究分野の1事例にすぎなくなってしまった。

その後、著者自らが長い空白をおいたと述べながら、白川村の大家族制度研究にあらためて取り組んだのが、農村社会学者の柿崎 [1975] である。柿崎は、「白川村の『大家族』成員が合掌造りの大家屋内に常時居住していた」という従来の通説と [同, 48 頁], 「『大家族』成員が一年を通じて全員が日常的家計共同を営んでいたか」という疑問をもとに [同, 50 頁], このテーマについて再検討をおこなった。そして、非嫡系成員が母屋とは別宅の「コヤ」に住んでいたことや、統計資料にあらわれにくい出稼者の存在をもとに、白川村の大家族がもともと解体を円滑におこなえる組織であったことを明らかにした。

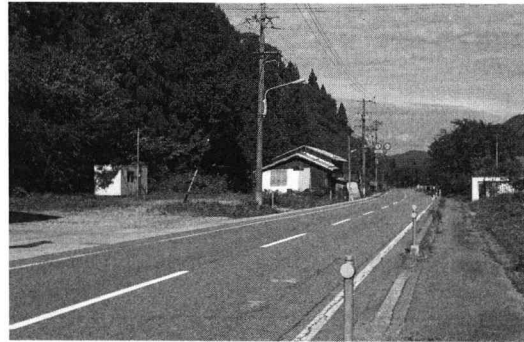
3. ダム開発問題の再燃

戦後しばらくすると、それまで凍結されていたダム開発が再開され、1957（昭和32）年に着工、1961（昭和36）年に竣工した御母衣ダムの建設反対運動により、庄川流域におけるダム開発問題が再燃する。御母衣ダムとは、1952（昭和27）年にその建設計画が公表され、庄川村の中野集落301戸を最大として、同じく庄川村の海上集落、赤谷集落、岩瀬集落や白川村の尾神集落を水没させ、牧集落や福島集落、秋町集落を集団離村に追い込んだ戦後最大級のロックフィルダムである。その建設規模があまりにも大きく、白川村と庄川村の住民生活に多大な影響を与えるので、死守会という御母衣ダム建設反対運動の組織が結成されて、激しい抗議活動をおこなったため、全国的に注目された。とくに、庄川村の中野集落は、急峻な山地の中で平坦な土地が広がる経済的な拠点であったため、水没に対する抵抗が強かった。

この御母衣ダム建設の反対運動については、小寺編著 [1986] と浜本 [2011] が包括的にまとめているので、参照されたい。ごく簡単に小寺 [1956] の調査結果を紹介すると、「庄川村の打撃は多大で、全耕地面積の過半を失うばかりでなく、しかも最も肥沃な部分が水没する」うえ [同, 245 頁], 「御母衣発電計画に対して地元が猛烈に反撃した動機が作ったのは、政治家や起業者側の不誠意 (ママ)



御母衣ダム建設中の御母衣商店街
1961(昭和36)年白川村教育委員会所蔵



過疎化の進む御母衣集落
2011(平成23)年10月撮影

写真6 御母衣集落の景観変化

きわまる強権的な態度、直接的あるいはボスを使っのの圧迫や誘惑、金で解決すればよいといった態度であった」という[同, 245頁]。一方、猛烈な反対運動があったにも関わらず、「電源開発株式会社があくまでも事業遂行の決意をすてなかつたのも、この貯水池建設が庄川流域最大の御母衣発電所のためばかりでなく、庄川下流に(中略)莫大な利益をもたらすからであった」[同, 238頁]。それが一転して事態の収束に向かつたのは、死守会側が納得のできる補償内容を電源開発株式会社を求める覚書を交わしてからのことであるが、この経緯そのものが研究上の関心を引き寄せていた。

また、御母衣ダムの社会的・経済的な影響力があまりにも大きかつたため、御母衣集落とそれに隣接する平瀬集落、そして白川村と荘川村の水没・離村した集落のその後について注目が集まつたが、それらに関する既存研究は案外少ない。例えば、小山[1964]が、御母衣ダム建設による平瀬集落の一時的な繁栄とそれに伴う大家族制度の崩壊について概要を述べており、武石[1962]が白川村と荘川村における水没集落の転出について統計データをまとめている。最近では、浜本編著[2011]が御母衣ダム建設前後の白川村と荘川村の人口変化や観光化、過疎化などについて概説している。ただし、いずれも概説の域を出ていない。

御母衣ダムの建設に伴って、土木建設従業者が大量に流入し、彼らの消費を目当てにして小売業やサービス業、パチンコ屋や劇場などの娯楽産業が進出してきたことは、前述したとおりである。ところが、彼らはダム開発による繁栄が長く続かないことを知っていたので、庄川沿岸の洪水を受けやすい土地を借りて、バラックのような簡素な住居を建て、お互いに近所付き合いの少ない中で暮らしていたという。そして、ダム建設後は一部が国道改良事業などに従事して集落にとどまつたものの、大半は急速に離村していった(写真6, 図2)。また、御母衣集落に隣接する平瀬集落でも、御母衣ダム建設の他、モリブデンの鉱山開発や、1969(昭和44)年に大白川から温泉を引いて、温泉民宿が多数開業したことにより、一時的に繁栄したが、現在は過疎化が顕著である。

4. 桂と加須良の物語

ダムが次々と建設され、それに伴って道路の改良と電気の普及が進むと、その恩恵を受けた集落と開発から取り残された集落の間で、生活水準の格差が広がった。また、主要な道路が変わって、かつて交通の要所だつた集落の一部が衰退した。その中で、1960年代後半にマスコミで大きく取り上げられ、注目を浴びたのが上平村の桂集落と白川村の加須良集落である。両者は、行政区画と

しては別々の村に属していたが、実態としては協力関係にあった。

その桂集落と加須良集落について研究した論文として最も古いのは、管見の限り最上 [1936, 1937a, b, c] である。最上 [1936, 11-12 頁] は、「桂がどんなに避険地であるか一例をあげれば雪のない時節でさへ郵便物は十日にたゞ一遍、それも村人が廻りで往復六里の今は牛馬も通わぬ山道を赤尾まで出かけて集配するのである。その赤尾でさへ、細島の郵便取扱所へ一里、通常の郵便局といふものは隣の平村まで下らねば見当たらぬ。(中略) 飛驒の加須良に至りては更に一層の不便でそこから白川村鳩ヶ谷へ出るには川原や草叢の茂りで足跡も覚束ない路を三里余も辿らねばならず、買物など桂を通じて赤尾に出てゐる」と概況を説明している。

また、1941 (昭和 16) 年と 1943 (昭和 18) 年の 2 回にわたって加須良集落を訪れた医師の海野金一郎は、1980 (昭和 55) 年に『飛驒の夜明け』という書籍を発行している⁽⁹⁾。その書籍では、当時の生活を示す写真が数多く掲載され、かつ交通の便が悪いゆえに伝染病にかかっても治療を受けられない、死者が出ても医者に診断書を書いてもらうことができないため、埋葬できないなどの苦悩を綴っている。

交通の不便は第二次世界大戦後になってもあまり変わらない。芦倉集落と加須良集落をつなぐ道路は、車 1 台が何とか通れる道幅しかなく、大雨が降れば土砂崩れを起こし、冬には大雪によって数ヶ月間通行止めになっていた。桂集落でも、子どもが中学生になると西赤尾集落まで通学することが不可能なので、同地に下宿して、夏休みや冬休みなどの長期休暇中に自宅へ帰る生活をしてきた。生徒が帰宅途中で冬山で遭難しても気づかれずに、春の雪解け後に遺体で発見されたなどという話もある。そのような中で、桂集落と加須良集落の人々は、物質や情報の交換を求めて、外部からの訪問を歓迎していたという。

ただし、ダム開発による近代化が進行する以前は、五箇山と白川郷のあらゆる集落が同じような状況であった。それが、ダム開発に伴って国道 156 号線が整備され、その沿道の集落に電気が普及されると、桂集落と加須良集落は近代化から取り残されていく。例えば、電気は自家発電で、夜になると使えない。集落内に商店がないため、城端方面に出かける者があれば、各戸から大量の買い物を頼まれる。役場の職員が集落を訪れる機会があれば、車に乗せてもらって、町場でちょっとした用を足す。そのような近代化から取り残された生活は、1960 年代後半にマスコミで取り上げられ、全国的に注目されるようになった。

マスコミは、桂集落と加須良集落で取材をするため、5月の雪解けから11月の雪が降り始める直前まで滞在し、天候の変化をみて急いで帰っていったという。なぜなら、雪が降り始めたら、道路が通行不能になり、春の雪解けまで帰ることができないからである。また、マスコミに紹介されたことで、カメラマンや学生が訪れ、決まった宿泊費を払って滞在するようになった。そして、加須良集落の合掌造り民家や風景は、土産用の絵葉書となって広く流布していった。

ところが、加須良集落は広大な共有林を製紙業者に売却して、1967 (昭和 42) 年に全戸離村する。離村までの間、その売却益によって、加須良集落の住民はサングラスをかけてジープを乗りまわす贅沢な生活を営んでいたため、周辺集落から羨まれていた。そして、加須良集落には、裕福であるがゆえに若い住民が多かった。一方、桂集落では私有地が多く、焼畑や木炭生産の目的以外に森林を伐採することが少なかった。そこで、出稼ぎによって現金収入を得ていたため、若い世代が

村外に流出し、高齢化が進んでいた。そのため、桂集落では、冬の雪下ろしで加須良集落の援助を受けなければ、生活を維持できない状況であった。その状況下で加須良集落が集団離村を決めたため、桂集落は自力で生活できなくなり、離村するための資金を得るために電力会社へ土地を売って、1970（昭和45）年に集団離村をした。

なお、離村前の桂集落の生活については、小坂谷 [1969] と寺崎 [2004] に詳しい。前者は、桂集落における合掌造り民家の売却先や家族構成、結婚難、生活水準、教育環境、山の権利関係、マスコミや学生の訪問などについて詳細な記録を残している。一方、後者は、桂分校の教師であった筆者が、桂集落の集団離村後に児童とその家族に対する思い出として綴った記録を後に活字にしたものであり、生業の様子や離村の経緯を詳細に述べている点で、資料的な価値が高い。しかも、同書は写真を数多く掲載しており、当時の様子をビジュアル面からも活写している。

また、山口 [1972] は、白川村の牛首、大窪、馬狩、加須良の各集落や上平村の桂集落における過疎化や廃村の動向について論じている。この研究では、1962（昭和37）年における加須良林道の竣工がトラックの通行を可能にし、山林の価値を増大させたことや、秋には越冬のために食糧の購入や保存、燃料の保存などで多忙を極めていたこと、子どもが中学に入ると寮に入るか下宿しなければならなかったため、多大な出費を有しても、教育の機会均等に程遠かったことなどを明らかにしている。



下流からみた加須良集落
1955(昭和30)-1960(昭和35)年 白川村教育委員会所蔵



加須良集落の跡
2012(平成24)年6月撮影

写真7 加須良集落の景観変化



かつて桂集落のあった桂湖
2012(平成24)年6月撮影



桂集落の水没を記録した石碑
2012(平成24)年6月撮影

写真8 桂集落の跡

以上のように、庄川流域の他集落が生活を向上させていった中、桂集落と加須良集落の生活が相変わらず不便であったことと、加須良集落が林道建設によって共有林を売却できるようになったことが、これら2集落の集団離村を決定づけたと考えてよい。なお、離村後、加須良集落の住民は土地を売らず、そのうち白川村の他集落に移住した住民が近年まで特産品の赤カブを栽培していた(写真7)。一方、桂集落は境川ダムの建設によって桂湖の湖底に沈み、観光地となっている(写真8)。そして、桂集落と加須良集落は、集団離村以前にマスコミやカメラマン、学生などから注目されたがゆえに、生活の記録が残され、五箇山と白川郷の生活史として語られ続けている。

5. 本格的な観光化と学術研究の停滞

先に触れたように、1970(昭和45)年における相倉集落と菅沼集落の史跡指定は、五箇山の観光化を進展させた。また、1973(昭和48)年には、五箇山各集落の合掌造り民家を移築した観光施設として、菅沼集落のすぐ隣に「五箇山青少年旅行村 合掌の里」を開村させた。

このような動向を背景として、五箇山の合掌造り民家に焦点を当てた新福[1975a, b, c]や相倉集落の形態に着目した菅原[1976]などの建築史的な研究がおこなわれた。中でも、新福[1975a]は、上平村各集落における戸数や床面積の変化に詳細なデータを残しており、資料的な価値が高い。ただし、それら以外で1970～80年代における五箇山の民家や集落に関する研究は、管見の限り山口[1984]や玉置・岡本・押谷ほか[1984a, b, c]などごくわずかである。とくに、山口[1984]は、平村と上平村における観光開発の経緯や、観光業の動向とそれらに伴う集落の変貌について論じており、一読に値する。それらに加え、史跡指定集落の保存管理計画策定報告書として発行された平村[1977]と上平村教育委員会[1978]が、五箇山に関する研究論文や調査報告書の少なかった当時の貴重な記録となっている。例えば、平村[1977]は、当時相倉集落に残っていた合掌造り民家21軒のうち、明治時代に建設されたものが18軒、大正時代に建設されたものが1軒で、江戸時代から続いているのはわずか1軒にすぎないことを明らかにしている(表10)。これによって、合掌造り民家が養蚕業の発展とともに普及した近代建築物であることが、明確になっていったのである。このように、史跡として保存管理する必要性から個別の合掌造り民家に関する詳細な記録が残されていった。

なお、1970～80年代に五箇山の研究が少なかった要因としては、ダム開発問題が一区切りついていたことや、相倉集落と菅沼集落が史跡に指定されたことで、合掌造り民家の維持管理に当面の目途が立っていたこと、その割に観光客数が伸び悩んでいたこと(図7)などがあげられる。当時

は、まだソフトツーリズムやルーラルツーリズムといった観光形態があまり普及しておらず、むしろスキー場や温泉、ゴルフ場、海水浴場といった大規模開発に関心が向かっていた。

その中で、1968(昭和43)年に財団法人観光資源保護財団(以下、観光資源財団と略)の名称で設立され、農村景観の保全を観光化

表10 相倉集落における家屋形態別の建築年

	江戸	明治	大正	昭和 戦前	昭和 戦後	不明
合掌造り	1	18	1	-	-	1
瓦葺き	-	3	2	2	-	9
トタン葺き	-	-	-	-	-	1

資料：富山県東砺波郡平村「史跡越中五箇山相倉集落保存管理計画策定報告書」, 1977

につなげようとしていた現・日本ナショナルトラストの試みは特筆に値する。実際にも、観光資源保護財団 [1978] は、五箇山の観光資源として、天然林やスギ林、トチノキやケヤキなどの天然記念物、庄川をはじめとする河川、山岳といった自然的資源の他、合掌造り民家や史跡、民謡、平家落人説、和紙や玩具などの民芸品といった人文的資源、青少年旅行村やユースホステルなどの宿泊施設、大牧温泉や五箇山温泉といった観光施設資源、自然公園などを取り上げている。

この観光資源保護財団は、それ以前にも 1969（昭和 44）～1971（昭和 46）年にかけて白川郷で合掌屋根の葺き替えに補助金を出していた。つまり、同財団は設立当初から合掌造り民家の保存による観光化の推進を支援していたといえよう。その背景としては、後に白川村観光の中心となる荻町集落が、ダム開発の恩恵をあまり受けられず、地域おこし的手段として自ら合掌造り民家を活用した観光化を目指していたことがあげられる。同集落では、1960 年代後半から有志が地域住民に対し、合掌造り民家で民宿をやろうと呼びかけていた。それまで、荻町集落の合掌造り民家は、1 軒当たりの居住面積が小さく、建築史的にほとんど注目されてこなかった。このため、荻町集落は白川村の観光マップに地名すら掲載されていなかった。

むしろ、1960 年代後半に白川村が観光地として売り出そうとしていたのは、家構えの大きな芦倉集落であった。1970（昭和 45）年から始まった日本国有鉄道によるディスカバー・ジャパンの観光キャンペーンで宣伝用のポスターに用いられたのも芦倉集落の風景である（写真 9）。だが、芦倉集落の合掌造り民家は、この直後から移築や改築によって消えていった。そもそも芦倉集落は急峻な山に囲まれた狭い土地に家屋が 5 戸しかなく、民宿や土産物屋を営むことのできる規模でなかったため、観光地としての開発可能性が小さかった。



写真 9 観光用に撮影された芦倉集落
1965(昭和 40)–1970(昭和 45)年 白川村教育委員会蔵

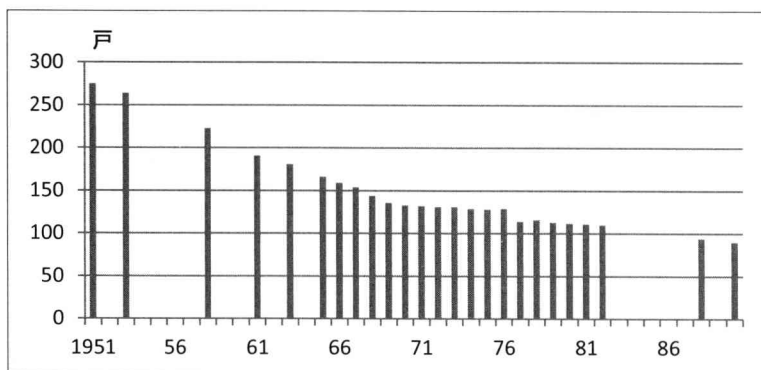


図 9 白川村荻町集落における合掌造り民家の戸数

資料：白川郷荻町集落の自然環境を守る会『白川郷荻町集落 20 年のあゆみ』, 1991

一方、荻町集落はすでに合掌造りの屋根を下していた民家が多かったが、それでも集落規模が大きく、合掌造り民家の絶対数が多かったため、観光地としてのより大規模な開発可能性を備えていた(図 9)。そのような条件のもと、1969（昭和

44)年に観光資源保護財団が「白川郷合掌造り民家群」を保護対象とし、かつ白川郷合掌家屋保存組合が設立されたのである。そして、おもに加須良集落と馬狩^{まがり}集落の合掌造り民家を荻町集落に移築して、1972(昭和47年に白川村合掌村(現・白川郷 野外博物館 合掌造り民家園)を開設した。

また、1971(昭和46)年には、地域内資源を「売らない・貸さない・こわさない」という3原則を掲げた「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」を設立し、荻町集落の景観を本格的に保全するようになった。建物や看板などの色を黒や黒褐色で統一するようになったのは、同会が住民憲章を制定してからのことである。ただし、この住民憲章の存在は、しばらく知られてこなかった。それが、1976(昭和51)年に荻町集落の合掌母屋60棟と母屋以外49棟が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、さらに翌年の1977(昭和52)年に白山スーパー林道が開通すると、白川村の観光客数が少しずつ増加し(図7)、1990年代に入ってから、あらためて研究上の関心を集めるようになった。

西山・三村[1990]はその先駆けであり、荻町集落における観光資源の掘り起こしや保存、観光客誘致の手法について検討しており、西山・三村[1995]は同集落における景観の目標像と修景をシミュレーションした結果ををまとめている。そして、同年の1995(平成7)年に、荻町集落が平村の相倉集落や上平村の菅沼集落とともに世界文化遺産に登録されると、その後は荻町集落の観光化や景観保全に関する研究が急増していった。世界文化遺産登録後の荻町集落を対象とした研究として、観光化の影響については大野・杉山・有本ほか[1998]や黒田・下村[2001]、景観保全やそれに伴う集落の生活変化に関しては高橋・藤本・楠本[2000]や黒田・下村・小野ほか[2001]などが初期の成果となる。

なお、荻町集落は先述したように1960年代まで観光マップに地名すら掲載されない集落であった。その原因として考えられるのは、従来の学術研究や文化財としての関心から外れていたことにある。荻町集落は目立った大家族があったわけでもなければ、ダム開発の影響を直接的に強く受けたわけでもない。同集落の合掌造り民家は江戸時代に建設されたものが大半を占めており(表11)、表10で示した相倉集落の民家よりもおおよそ古いという特徴があるが、全体的に建坪が小さく、改築や移築が早くから進行していたため、それまで個別の建造物を対象にしてきた文化財としての価値が認められてこなかった。

それが一転して学問的に注目されたのは、すでに改築や移築が進んでいたがゆえの積極的な修景による景観保全が、観光まちづくりにおいて少なからぬ効果をあげたため、そのおもな担い手であった都市工学や建築学、造園学がそれらの問題点や今後の課題を論じるようになったからだと考えられる。また、世界遺産登録への申請をするには、現状での保存状態と将来的な保存計画を示すこ

とが必要条件となっているため、その学問的な根拠が歴史や文化的な価値よりも保存の実現性に移ってしまった。そのために、五箇山・白川郷研究の中心課題が工学系の分野に移行してしまい、民俗学的・歴史学的な研究が少数

表 11 荻町における合掌造り民家の建設年

	江戸	明治	大正	昭和戦前	昭和戦後
保存	31	1	2	1	1
移築	-	-	1	-	5
改造	-	-	3	-	1

資料：岐阜県大野郡白川村教育委員会「昭和49年度白川村荻町伝統的建造物群保存地区調査報告書」,1975

注：保存は、移築や大規模な増改築をおこなっていない合掌造りの民家を意味する。

派になっていった。そのことは、五箇山と白川郷の合掌造り民家が、山村生活の歴史から切り離されて保存されていくきっかけになったと思われる。

その中で、白川村の大家族制度をこの時期にあらためて取り上げた柿崎 [1997, 1999] や柿崎編 [2001] は、白川村の生活史を見直そうとする試みだったのかもしれない。ただし、前述したように観光化の最も進んだ荻町集落には目立った大家族が存在していなかったため、その試みが合掌造り民家の保存に対して効果的な役割を果たしているようには思われない。

また、世界文化遺産登録による観光化とそれに伴う景観や住民生活の変化については、白川村荻町集落を対象にした研究が先行していたが、2002（平成14）年からは荒井・十和田 [2002a, b] や垣内・吉田 [2002] といった五箇山の世界文化遺産登録地域を対象とする研究成果が発表されるようになった。そして、世界文化遺産登録による観光化への効果やそれに伴う住民の生活変化、観光業を持続化させるために必要な景観保全の手法や交通手段などが、積極的に議論されるようになった。その結果として、従来から議論されてきた大家族制度や焼畑・養蚕などの生業変化、ダム開発の影響といった研究課題はますます等閑視されるようになってきている。研究テーマには流行が付きものではあるが、それは地域の表象や生活の実態に大きな影響を与える。このままでは、かつての山村生活の記憶からかけ離れた、観光のみを目的とした遺産の保存が続けられていくような気がしてならない。

⑤……………まとめ

本稿は、五箇山と白川郷に計3ヶ所の世界遺産登録地域を有する庄川流域を事例として、観光化の進展によって忘れられていった開発の歴史と研究史をあらためて見直し、かつての山村生活の様子を思い起こす試みをおこなったものである。現在の五箇山と白川郷においては、世界遺産に登録された相倉集落、菅沼集落、荻町集落の合掌造り民家ばかりが注目されているが、かつては庄川流域一帯で同様の民家に住み、焼畑や養蚕を中心とした生活を営んでおり、明治時代から学問的に注目されていた。中でも、大家族制度と合掌造り民家に関する研究は、古代や中世からの連続性を強調する説と近世・近代に形成された比較的新しいものであるという説が対立して、激しい論争を繰り広げたために広く注目を集めた。

ところが、1920年代からのダム開発によって、合掌造りの屋根を下ろす民家が急増し、かつ電気の普及や道路の延長などによって近代化が進むと、急激な景観変化に注目が集まるとともに、合掌造り民家を保存すべきだという声があがるようになった。それはすでに戦前からみられたが、本格化するのは1950年代以降のことである。また、1950年代以降はそれまでのダム開発に加えて道路改良事業が本格化したため、五箇山と白川郷では離農が進み、土木建設業や商業、サービス業中心の生活へと変わっていった。そのような中、ダム開発の恩恵を受けることなく、近代化から取り残されて離村していった桂集落や加須良集落がマスコミから注目された。

相倉集落と菅沼集落が史跡に指定されたのは、ちょうど五箇山と白川郷で離村が相次いでいた頃のことである。同じ頃、白川村の荻町集落が合掌造り民家を活用した観光まちづくりを開始するが、それらの観光化が本格的に注目されるのは1990年代以降のことである。ただし、1990年代以

降の関心は、合掌造り集落の景観保全や観光化の影響へと移行し、かつてのような山村の生活や文化に関わる研究は減っていった。しかし、そのことが必ずしも生活や文化の歴史に基づいていない観光化の推進へとつながり、かつての山村生活を経験してきた世代にとっては、違和感を抱く要因となっている。

註

- (1)——壁がなく、地上から茅を葺いた合掌造りの民家を建築学の用語としては「天地根元造り」、「山小屋式の家」もしくは「マタダテ」、「サスヅクリ」などと呼んだ。既存研究では、「マタダテ」と呼んでいることが多い。
- (2)——大家族制度や合掌造りの起源論については、川口 [1934] に詳しい。ただし、その内容は、アイヌとの関わりを示唆しながら、後でそれを否定するなど、あまり論理的でない点がみられる。
- (3)——赤木清は、江馬修のペンネームである。
- (4)——多志彌一は、江馬修のペンネームである。
- (5)——庄川問題については、石山 [1932]、野間 [1935a, b]、小寺 [1963] に詳しい。また、平野 [1952] は、飛州木材株式会社の代表として行政訴訟を起こした立場から庄川問題を振り返っており、一読に値する。一方、武井 [1952] は、内務省の政府委員として庄川問題に対処した経緯を述べている。
- (6)——小原ダムや成出ダム、椿原ダムの建設による集落の移転や補償問題については、小寺・植村 [1953a, b] に詳しい。
- (7)——文部省文化財保護委員会は、1968 (昭和 43) 年の改組で文化庁に統合された。
- (8)——羽馬家は現在も合掌造りの民家に住んでいるが、すでにユースホステルを廃業している。
- (9)——海野金一郎『飛驒の夜明け』は 1980 (昭和 55) 年に農山漁村文化協会から刊行されたが [海野, 1980]、後に絶版となり、2006 (平成 14) 年に桂書房から刊行された『孤村のともし火』に再録された [海野, 2006]。
- (10)——芦倉集落と加須良集落を結んでいた道路は、現在通行できない。

文献

- 相川春喜 「飛驒白川村『大家族制』の踏査並に研究 (中)」, 歴史科学 4-11, 1935a, 180-190 頁。
- 相川春喜 「日本型の家内賦役制—その残留せる—典型・飛驒白川村『大家族制』の研究を機縁として」, 歴史科学 4-12, 1935b, 37-58 頁。
- 赤木 清 「白川村の大家族制度をめぐる諸問題」, ひだびと 4-12, 1936, 1-10 頁。
- 安達實・髭本裕昌・北浦勝 「庄川小牧ダム建設と流木問題」, 土木史研究 18, 1998, 561-568 頁。
- 荒井崇浩・十和田朗 「観光地化に伴う農山村伝統集落の空間変容及び住民生活への影響に関する研究—富山県五箇山相倉集落を事例として—」, 都市計画別冊都市計画論文集 37, 2002, 949-954 頁。
- 荒井崇浩・十和田朗 「農山村の観光地化に伴う住民の観光業への生業意識の形成過程」, 観光研究 14-1, 2002, 17-24 頁。
- 有賀喜左衛門 「タウト氏の観た白川村」, ひだびと 4-11, 1936, 1-6 頁。
- 石原憲治 「飛越の旅」, 民俗建築 1, 1950, 6-14 頁。
- 石山賢吉 『庄川問題』, ダイアモンド社, 1932, 436 頁。
- 稲垣栄三 「山村生活の成立根拠 (1)」, 建築史研究 10, 1952, 1-14 頁。
- 稲垣栄三 「山村生活の成立根拠 (2)」, 建築史研究 12, 1953, 20-29 頁。
- 稲垣栄三 「山村住居の成立根拠 (3・完)」, 建築史研究 15, 1954, 11-23 頁。
- 岩本通弥編 『ふるさと資源化と民俗学』, 吉川弘文館, 2007, 298 頁。
- 岩本通弥編 『世界遺産時代の民俗学 グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』, 風響社, 2013, 418 頁。
- 上島正徳 「白川郷の経済地域的構成」, 地理学評論 25-8, 1952, 295-303 頁。
- 海野金一郎 『孤村のともし火』, 桂書房, 2006, 166 頁 (初出 海野金一郎『飛驒の夜明け』, 農山漁村文化協会, 1980, 236 頁)。

- 江馬 修 「白川村大家族部落と石器時代の遺跡」, ドルメン 3-6, 1934, 11-13 頁。
- 江馬三枝子 「白川村木谷の民俗 (2) 一明治前半期に於ける一」, ひだびと 5-4, 1937, 7-15 頁。
- 江馬三枝子 「白川村木谷の民俗 (14-完) 一明治前半期に於ける一」, ひだびと 6-8, 1938, 8-16 頁。
- 江馬三枝子 『飛騨白川村 [新装版]』, 未来社, 1996, 631+11 頁 (初版 1975)。
- 大野郡白川村史編纂委員会編 『白川村史』, 大野郡白川村, 1968, 1214 頁。
- 大野功仁郎・杉山道雄・有本信昭・荒幡克己・アドリアノ・チアニ 「白川村におけるグリーン・ツーリズムの研究」, 岐阜大学農学部研究報告 63, 1998, 97-104 頁。
- 岡村利平 「白川村家族制と大寶式年戸籍との比較研究」, 飛騨史壇 1-2, 1914, 1-11 頁。
- 垣内恵美子・吉田謙太郎 「CVM による『文化資本』の便益評価の試み—世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例研究を通じて—」, 文化経済学 3-2, 2002, 63-74 頁。
- 柿崎京一 「資本制成立期の白川村『大家族』の生活構造」, 村落社会研究 11, 1975, 45-122 頁。
- 柿崎京一 「飛騨白川の生業と山村生活—山地利用の諸形態を中心として」, 社会学年誌 (早稲田大学) 38, 1997, 79-102 頁。
- 柿崎京一 「飛騨白川村『大家族』の生活構造—シンガイ稼ぎの実態分析—」, 村落社会研究 5-2, 1999, 1-12 頁。
- 柿崎京一編集代表 『白川郷文化フォーラム' 93 大家族制』, 白川村・白川村教育委員会, 2001, 118 頁。
- 家族問題研究会編 『山間聚落の大家族—越中五箇山・飛騨白川村の実証研究』, 川島書店, 1988, 247 頁。
- 勝野 浩 「荘川村と庄川問題」, 岐阜史学 99, 2002, 51-67 頁。
- 加藤義治郎 「体質人類学上より見たる白川人」, ひだびと 5-7, 1937, 1-10 頁。
- 上平村教育委員会 『国指定史跡越中菅沼集落保存管理計画策定報告書』, 1978, 24 頁。
- 川口孫治郎 『飛騨の白川村』, 住伊書店, 1934, 255 頁。
- 観光資源保護財団編 『越中五箇山』, 1978, 70 頁。
- 黒田乃生・下村彰男 「世界遺産登録後の白川村荻町における観光の現状とその方向性に関する考察」, 都市計画別冊 都市計画論文集 36, 2001, 253-258 頁。
- 黒田乃生・下村彰生・小野良平・熊谷洋一 「白川村荻町伝統的建造物群保存地区における集落景観の特徴とその保全に関する研究」, ランドスケープ研究 64-5, 2001, 759-764 頁。
- 黒田乃生 「白川村荻町における文化的景観の保全に関する研究」, 東京大学農学部演習林報告 110, 2003, 71+157 頁。
- 黒田乃生・小野良平 「白川村研究における文化財としての集落景観保全における問題点」, ランドスケープ研究 66-5, 2003, 665-668 頁。
- 黒田乃生 『世界遺産白川郷—視線の先にあるもの』, 筑波大学出版会, 2007, 249 頁。
- 小坂谷福治 『もだえる合掌集落—五箇山の民俗史 1—』, 自費出版, 1969, 140 頁。
- 児玉幸多 「飛騨白川村の大家族制度と其経済的基礎 (一)」, 歴史学研究 10-5, 1940a, 2-31 頁。
- 児玉幸多 「飛騨の白川村」, 史蹟名勝天然記念物 15-11, 1940b, 43-51 頁。
- 小寺廉吉 「越中五ヶ山の内の梨谷聚落の研究」, 地理学評論 10-5, 1934, 1-30 頁。
- 小寺廉吉・植村元覚 「水資源の開発に伴う補償問題—特に庄川流域に於ける電源開発に伴う補償問題—」, 富山大学紀要経済学科論集 1, 1953a, 55-78 頁。
- 小寺廉吉・植村元覚 「水資源の開発に伴う補償問題 (続き)—特に庄川流域に於ける電源開発に伴う補償問題—」, 富山大学紀要経済学部論集 2, 1953b, 27-50 頁。
- 小寺廉吉 「水没村の問題—庄川筋における事例を中心として」 (多田文男・石田龍次郎編 『現代地理講座第 5 巻—海洋と陸水の地理』, 河出書房), 1956, 235-248 頁。
- 小寺廉吉 『庄川峡の変貌』, ミネルヴァ書房, 1963, 246+10 頁。
- 小寺廉吉編著 『山村民とその居住地 [ふるさと] の問題 (人間の意識と行動との進化の研究)』, かとう印刷社, 1986, 341 頁。
- 小山 隆 「越中五箇山及び飛騨白川地方に於ける家族構成の研究 (1)」, 研究論集 (高岡高等商業学校) 6-2, 1933, 277-319 頁。
- 小山 隆 「越中五箇山に於ける家族の変遷」, 研究論集 (高岡高等商業学校) 8, 開校 10 周年記念号, 1935, 353-408 頁。
- 小山 隆 「山間聚落と家族構成—飛騨白川村を中心として—」, 社会学 4, 1936, 45-97 頁。
- 小山 隆 「祖山と平瀬—電源開発の地域社会に及ぼす人口学的影響—」, 越飛文化 11, 1964, 1-14 頁。
- 才津祐美子 「白川村発見—『大家族制』論の系譜とその波紋」 (小松和彦選歴記念論集刊行会編 『日本文化の人類学—異文化の民俗学』, 法蔵館), 2008, 428-449 頁。

- 新福祐子 「富山県の合掌住宅（第1報） その史的考察」, 家政学雑誌 26-3, 1975a, 45-52 頁。
- 新福祐子 「富山県の合掌住宅（第2報） その生産的役割」, 家政学雑誌 26-4, 1975b, 61-68 頁。
- 新福祐子 「富山県の合掌住宅（第3報） 明治22年の家屋取調帳」, 家政学雑誌 26-8, 1975c, 64-70 頁。
- 菅原洋一 「五箇山相倉集落の形態について」, 東海支部研究報告集 14, 1976, 13-16 頁。
- 鈴木和美 「庄川流水争議（一） 庄川の初期電源にともなう水利権問題を中心に」, 岐阜史学 98, 2001, 73-84 頁。
- 鈴木壽六・今村昌一 「日本人掌紋ノ研究（第8篇） 五箇山住民ノ掌紋ニ就テ」, 金沢医科大学十全会雑誌 42-2, 1937, 209-229 頁。
- 瀬川清子 「飛騨白川村見聞記」, 旅と伝説 8-10, 1935, 67-80 頁。
- 平村 『史跡越中五箇山相倉集落保存管理計画策定報告書』, 1977, 30 頁。
- タウト, ブルーノ著, 篠田英雄訳 『日本美の再発見』, 岩波書店, 1939, 182 頁。
- 高木茂樹 「庄川流域の諸判決における利益考量と理論構成—事情判決制度成立前史の一断面として—」, 久留米大学法学 58, 2007, 245-302 頁。
- 高木正義 「飛騨の白川村」, 社会 1-9, 1889, 1-29 頁。
- 高橋ふさ子・藤本信義・楠本侑司 「民宿・店舗経営に伴う合掌家屋の形態変化とその要因—岐阜県白川村荻町集落を事例として—」, 日本建築学会関東支部研究報告集 II-71, 2000, 169-172 頁。
- 武井群嗣 「発電と流水の闘い 庄川事件の回顧」, 文化と緑化 2-5, 1952, 51-54 頁。
- 武石 勉 「御母衣ダムの水没部落—現地調査報告—」, 大分大学経済論集 13-4, 1962, 1-26 頁。
- 竹内芳太郎 「飛騨白川村の民家」, 早稲田建築学報 2, 1923, 1-12 頁。
- 竹内芳太郎 「サスヅクリ考」, 日本民俗学のために 9, 1948, 13-50 頁。
- 多志彌一 「白川村中切地方は血族結婚部落なりや—『民族生物学研究』第四輯を読み—」, ひだびと 6-2, 1938, 46-48 頁。
- 玉置伸悟・岡本通弘・押谷茂敏・堀内勝 「富山県における農家住宅の間取りの類型化とその発展過程—砺波・五箇山地方における農家住宅の研究 その1—」, 日本建築学会北陸支部研究報告集 27, 1984a, 117-120 頁。
- 玉置伸悟・岡本通弘・押谷茂敏・堀内勝 「富山・広間I型系, III型系における部屋の使われ方—砺波・五箇山地方における農家住宅の研究 その2—」, 日本建築学会北陸支部研究報告集 27, 1984b, 121-124 頁。
- 玉置伸悟・岡本通弘・押谷茂敏・堀内勝 「農家住宅規模の動向と室構成変化—砺波・五箇山地方における農家住宅の研究（その3）—」, 日本建築学会北陸支部研究報告集 27, 1984c, 125-128 頁。
- 玉城 肇 「日本における大家族制の研究」, 刀江書院, 1959, 376+3 頁。
- 寺崎満雄 「さよなら, 桂」, 桂書房, 2004, 216 頁。
- 富田令禾 「白川式切妻屋根の再検討—併せて三浦氏に答ふ—」, ひだびと 5-3, 1937, 51-54 頁。
- 西山徳明・三村浩史 「観光地域が主体的に発展できる観光活動設計条件に関する研究」, 日本都市計画学会学術研究論文集 25, 1990, 631-636 頁。
- 西山徳明・三村浩史 「伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究—白川村荻町合掌集落を事例として—」, 日本建築学会計画系論文集 474, 1995, 133-141 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（1） 村の概況及び白川村研究の沿革」, 日本建築学会研究報告 13, 1951a, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（2） 調査方法」, 日本建築学会研究報告 13, 1951b, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（3） 成立過程に於ける社会経済的変動について」, 日本建築学会研究報告 13, 1951c, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（4） 成立期に於ける住生活」, 日本建築学会研究報告 13, 1951d, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（5） 成立過程に於ける建築生産について」, 日本建築学会研究報告 13, 1951e, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（6） 崩壊過程に於ける社会経済的変動について」, 日本建築学会研究報告 13, 1951f, 1-3 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（7） 崩壊過程に於ける生活について」, 日本建築学会研究報告 13, 1951g, 1-4 頁。
- 農村建築研究会歴史部会 「飛騨白川村の民家について（8） 崩壊過程に於ける建築生産について」, 日本建築学会研究報告 13, 1951h, 1-4 頁。

- 野間海造 「庄川に於ける水利権問題 (1)」, 農業経済研究 11-1, 1935a, 88-120 頁。
- 野間海造 「庄川に於ける水利権問題 (2)」, 農業経済研究 11-2, 1935b, 105-140 頁。
- 野村正治 「白川村大家族制の現状」, 飛騨史壇 10-7, 1931, 1-10 頁。
- 濱田青陵 「飛騨の旅の昔話」, ひだびと 4-4, 1936, 2-7 頁。
- 浜本篤史編著 『御母衣ダムと荘白川地方の 50 年』, まつお出版, 2011, 110 頁。
- 平野増吉 「電力開発と流木権—庄川問題にふれて—」, 月刊木材 11-12, 1952, 2-6 頁。
- 福島正夫 「山村の『家』と資本主義—飛騨白川村の分家事件を通じて—」, 東洋文化研究所紀要 6, 1954, 1-97 頁。
- 福田徳三 『国民経済講話』, 同文館, 1925 (初出: 佐藤出版部, 1917), 1348+35 頁。
- 藤森峯三 「飛騨ノ風俗及其他」, 東京人類学会雑誌 29, 1888, 305-311 頁。
- 本庄榮治郎 「飛騨白川ノ大家族制」, 京都法学会雑誌 6-3, 1911, 440-466 頁。
- 本庄榮治郎 「飛騨白川の戸口」, 経済論叢 (京都大学) 47-3, 1938, 132-136 頁。
- 正木隆次郎 「越中農家の形態圈的区分—五箇山を中心として—」, 地理教育 聚落地理学論文集, 1935, 1-8 頁。
- 松野達雄 「飛騨白川村大家族制に関する若干の問題について—その一—」, 岐阜大学学芸学部研究報告人文科学 3, 1955, 69-80 頁。
- 三浦薫雄 「庄川木流し報告書—表紙の写真説明に—」, ひだびと 4-12, 1936, 24-28 頁。
- 三浦薫雄 「『白川式』切妻屋根に就て」, ひだびと 5-2, 1937, 45-51 頁。
- 溝口常俊 「焼畑村落の展開過程に関する歴史地理学的研究—飛騨白川郷を例として—」, 人文地理 38-2, 1986, 1-26 頁。
- 最上孝敬 「赤尾谷桂見聞 (一)」, ひだびと 4-12, 1936, 11-16 頁。
- 最上孝敬 「赤尾谷桂見聞 (二)」, ひだびと 5-1, 1937a, 51-57 頁。
- 最上孝敬 「赤尾谷桂見聞 (三)」, ひだびと 5-2, 1937b, 26-29 頁。
- 最上孝敬 「赤尾谷桂見聞 (四)」, ひだびと 5-3, 1937c, 15-19 頁。
- 山口和也 「観光地化と文化財保護に伴う山間集落の変貌—富山県平村上梨・相倉両集落の事例—」, 山村研究年報 5, 1984, 31-48 頁。
- 山口源吾 「庄川上流限界地域における過疎山村の動向」, 中央学院論叢 7-2, 1972, 127-146 頁。
- 山下晋司編 『資源化する文化』, 弘文堂, 2007, 334 頁。
- 米沢 康 『五箇山研究ノート』, 越飛文化研究会, 1962, 304 頁。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014 年 1 月 21 日受付, 2014 年 5 月 26 日審査終了)

Changes of Landscape in the Sho River Basin Caused by Large-scale Development and Tourism : Analysis Centered on Relationships between Research History and Development History

AOKI Takahiro

By reviewing the course of research and the history of development that has faded away with the promotion of tourism, this article aims to recall the past life in mountainous villages. To this end, the Sho River Basin, including Gokayama and Shirakawa-go with three World Heritage sites, is analyzed as a case study. Although now in Gokayama and Shirakawa-go, attention focuses on farmhouses with steep thatched roofs in Ainokura, Suganuma, and Ogimachi villages designated as World Heritage sites, similar farmhouses used to be common throughout the Sho River Basin, where people mainly engaged in slash-and-burn agriculture and sericulture activities. Due to the dam development since around the 1920s, followed by road improvement projects, a rapidly increasing number of households abandoned steep thatched roofs. Moreover, as the gap in the quality of life between each of the villages was growing, many villages were depopulated and abandoned. On the other hand, around 1900, researchers focused their attention on the origin of farmhouses with steep thatched roofs, and then they shifted their interests to the response of residents to the dam development and the changes of their lifestyle.

The dam development transformed the lifestyle of villagers in the Sho River Basin; agriculture fell into decay while the construction, commerce, and service sectors were growing. In addition, cultural property protection activities for farmhouses with steep thatched roofs gained momentum after World War II, and Ainokura and Suganuma villages were designated as historic sites in 1970, which further promoted tourism. Researchers also shifted their attention to the landscape preservation of villages with farmhouses with steep thatched roofs as well as the impact of tourism. Thus, the past life in mountainous villages has been forgotten. These trends, however, are hard for the generations who experienced the life before the advent of tourism to follow.

Key words: the Sho River, Gokayama, Shirakawa-go, dam development, research history
